

明日に生きる

—作文コンクール入選作品集—

第24号



平成25年度

東京都産業教育振興会

表紙デザイン

就職することがゴールではありません。働いても前へ走り続けることがより大きな喜びへと繋がるのだと思います。それはどんな職業でも同じなのでは、という思いを込めて描きました。

東京都立工芸高等学校
3年 デザイン科
伊藤 彩歌

明日に生きる

第二十四号

— 作文コンクール入選作品集 —

明日に生きる 第二十四号 ― 作文コンクール入選作品集 ― 目次

講 評

持続可能な社会を目指して 中学校の部

選考委員長（足立区立第十二中学校長）

杉浦伸一 1

選考を終えて

高等学校・専修学校の部

選考委員長（東京都立農産高等学校長）

後藤 哲 2

表彰式の記念写真

中学校の部

ページ

最優秀賞	大切	北区立王子桜中学校	二年	高橋和也	5
優秀賞	働くことは簡単ではない	新宿区立落合第二中学校	三年	大中璃子	6
優秀賞	指物との出会い	練馬区立開進第三中学校	三年	大西直己	8
優秀賞	笑顔のおすそわけ	東京都立白鷗高等学校附属中学校	二年	門岡春花	9
佳作	私の夢	愛国中学校	一年	横尾才咲	11
佳作	大きく変わることに	新宿区立牛込第三中学校	三年	戸田百香	13
佳作	農業体験で得たもの	世田谷区立松沢中学校	三年	舟橋朋央	14
佳作	相手になったつもりで	世田谷区立喜多見中学校	三年	沖山楨之介	15
佳作	大工への道	世田谷区立喜多見中学校	二年	光井良太	17
佳作	物をつくる喜び	中野区立中野中学校	一年	神山瑛理	19
佳作	私が思う職業観	荒川区立第七中学校	二年	田中千尋	20
佳作	今からできる仕事の基本	練馬区立中村中学校	二年	高崎野乃子	22
佳作	創造ものづくりフェアIN TOKYO	足立区立第六中学校	三年	村山ほのか	23
佳作	私の将来	足立区立第六中学校	三年	杉浦結奈	24

高等学校の部

佳作	職場体験を通して学んだこと	葛飾区立堀切中学校	三年	山本 魁	26
佳作	責任	葛飾区立一之台中学校	二年	齋藤 優里奈	28
佳作	職場体験を通して学んだこと	調布市立第四中学校	三年	吉井 季里	29
佳作	心に残る言葉	東京都立白鷗高等学校附属中学校	二年	峯 琴子	31
佳作	農業体験で収穫したもの	東京都立白鷗高等学校附属中学校	二年	遠嶋 美月	32
佳作	大自然の中で	東京都立白鷗高等学校附属中学校	二年	峰 壮鴻	34
佳作	職場体験を経て	東京都立大泉高等学校附属中学校	二年	荒川 七音	36
佳作	職場体験で学んだこと	東京都立大泉高等学校附属中学校	二年	常泉 乃愛	37
佳作	仕事	東京都立大泉高等学校附属中学校	二年	岡本 晋	39
佳作	職場体験で学んだこと	東京都立大泉高等学校附属中学校	二年	篠原 すみれ	40
佳作	職場体験から学びえたこと	東京都立大泉高等学校附属中学校	二年	立石 桐子	41
佳作	職業体験を通して	東京都立大泉高等学校附属中学校	二年	佐仲 杏美	43

最優秀賞	命を学ぶ責任	東京都立瑞穂農芸高等学校	三年	畠 明宏	45
優秀賞	夢の通過点	愛国高等学校	三年	鈴木 香南子	47
優秀賞	ボランティア活動を通して	東京都立農産高等学校	一年	加藤 幸乃	49
優秀賞	農業を学んで思うこと	東京都立農産高等学校	三年	千野田 雅美	50
佳作	将来の夢	愛国高等学校	三年	田邊 好	52
佳作	鉄道実習を通じて学んだこと	岩倉高等学校	三年	菅野 敦也	54
佳作	子供の健康を守りたい	蒲田女子高等学校	三年	細井 千春	55
佳作	私が学んだこと	国際理容美容専門学校	二年	高橋 真理	57

専修学校の部

ページ

佳	作	成長	東京都立農芸高等学校	三年	若松 なつき	58
佳	作	努力する事の重要性について	東京都立赤羽商業高等学校	二年	清水 紗弥加	60
佳	作	デザインを伝えるということ	東京都立忍岡高等学校	三年	矢代 美菜萌	62
佳	作	将来の夢	東京都立農産高等学校	一年	雑賀 優花	63
佳	作	インターンシップによって学び得たこと	東京都立第五商業高等学校	二年	中山 真穂	65
佳	作	伝統を受け継ぐ	東京都立農業高等学校	三年	深瀬 彩加	66
佳	作	舞台設営の力	中央工学校	二年	廣田 遥	68
佳	作	専門学校に入って学んだこと	中央工学校	一年	若松 正太郎	69

応募校等一覧表

作文コンクール選考委員名簿

あとがき

持続可能な社会を目指して

中学校の部 選考委員長

杉 浦 伸 一



本年度、中学校の部は昨年度を上回る三十八校百七十九編の応募がありました。その中から一次審査、二次審査を経て二十六編が入選作に選ばれました。

作文の内容は、技術・家庭科のものづくりなどの学習を通して体験したことや学んだこと、職場体験や勤労体験、ボランティア活動などの体験的な学習によって学んだことをもとに将来に対する考え方や心構えを述べるものでした。どの入選作品も内容の趣旨を踏まえ、日常生活の体験の中から、中学生らしい純粋な心と感受性でしっかりと物事をとらえ、評価し、それを実生活で活用していくこうとする意欲に満ち満ちた素晴らしいものでした。

選考に当たっては、内容や題材、文章構成、文字表記など、様々な評価の観点がありましたが、今回は特に、応募要項の内容や趣旨を踏まえたものであるかといった部分を重視して審査を行いました。

今回、最優秀賞に選ばれた高橋和也さんの「大切」では、

納屋の整理で捨てられる運命にあった輸入品の木箱に命を吹き込むまでの過程で様々なドラマがありました。最初、捨てることを勧めた和也さんは、お母さんの木箱に対する愛着と母の期待に応えたいという思いに心が動き、技術の授業で体得したものづくり経験がリメイクへの行動を起こさせました。木箱を、機能、構造、設置場所、目的、お母さんの好みなど様々な視点からじっと見つめ、構想を練っている和也さんの様子が浮かんできました。壊れたらまず直せないか考える「もったいない」精神が家族に浸透していて、出来上がった作品を拝見したくなりました。和也さんには、ものづくりを楽しむながら課題の解決を通して、創意工夫する力、思考力、判断力、表現力、主体的に取り組む姿勢、そしてそれらがすべて詰まった家族愛が心の中ではぐくまれたのだと感じました。

また、優秀賞に選ばれた、「指物との出会い」の大西直己さん、「笑顔のおすそわけ」の門岡春花さん、「働くことは簡単ではない」の大中璃子さんの三名の皆さんも甲乙つけがたい力作でした。

最後に、作文コンクールに応募してくださった生徒の皆さん、ご指導いただきました各学校の先生方、貴重な体験を生徒に与えてくださった保護者・地域・事業所の皆様にご心より感謝申し上げますとともに、持続可能な社会、産業界の底上げが必要とされる今日、明日を生きる若者たちに、二十五年間、貴重な体験を体験だけに留めることなく、深化、統合させ、あらゆる問題を解決していく能力として生きる力の定着を図っていただいている本取組がますます発展しますことを祈念いたします。

選考を終えて

高等学校・専修学校の部 選考委員長

後 藤 哲



今年の選考委員会は、初回から白熱した意見交換で幕を開けました。それは、今までの募集要項にややわかりにくさがあるのではないだろうかという疑問からです。応募される各学校、生徒のみなさんが、思いを込めて書き上げた作文が、内容的にとっても魅力ある作品に仕上がっているものの、残念ながら示されたテーマに正対していないという例が、過去に散見されたということです。そこで、書き手がわかりやすいテーマの見直しから始めました。そして、検討を重ね、今回の募集要項が決定しました。

新学習指導要領では、言語活動の充実を図るよう謳っています。東京都においても言葉の力再生プロジェクトが始まり、子供たちの思考力、判断力、表現力等を育むための学習の基盤となる言語能力の向上に取り組んでいるところです。この喫緊の課題ともいえる言語能力の向上を図る一つの方法としてこの作文コンクールが果たしてきた役割は大きく、しかももう二十四年目となります。いわば言語能力向上推進事業の先駆けといってもいいでしょう。

今年度は、一八校から総計一〇一編の応募がありました。専門教科の学習や勤労に係わる体験的な学習を通して、学び得たこと、感じたこと、考えたこと、それらを自己の進路に結び付けた作品が多くありました。生徒の職業的自立意識の希薄化が懸念され、真に自立した社会人の育成が叫ばれる中、さすが、専門高校生、専修学校生は、職業観や勤労観を身に付けて自分の夢に向かって力強く行動しているなというのが作品全体を通しての第一の感想です。これは、専門教科学習の特長が、教室でじっくり学ぶ↓学んだことを実践する↓再び教室で振り返り、自分の言葉でまとめる。この思考、実践の繰り返し学習のなせる技であると考えました。さらに実際に体験しながら考える力を深めていくと、やがて知識が智慧に変わることには驚かされました。体験を通してこそ身につくものがかいかに大切なのかを、みなさんの作品は訴えているような気がしてなりません。

このように考えると、作品に甲乙を付けるのは大変難しい作業でした。しかしその中でも独自の見方や考え方で述べられているか、主張に一貫性があるか、きらりと光る魅力ある内容か、さらには、将来の職業人としておおいに期待できるか等の観点で審査をしました。

専門学習や勤労体験を通して、人間としての在り方や生き方についての自覚を深め、自己の進路実現に向けさらに具体的な目標を掲げ、行動する姿がわかる作品。また自己肯定感や有用感が醸成されていく過程に触れることができる作品は高い評価を得ました。

「明日に生きる」、みなさんは、これから多くの課題に直面することでしょう。将来のスペシャリストとして、より深く考え、実践する力にますます磨きをかけてください。



平成 25 年度 作文コンクール表彰式（中学校の部） 12 月 20 日 東京都産業教育振興会



平成 25 年度 作文コンクール表彰式（高等学校・専修学校の部） 12 月 20 日 東京都産業教育振興会

中学校の部 最優秀賞

大 切

北区立王子桜中学校 二年

高 橋 和 也

先日、母が納戸の片付けを始めた。

「捨てればいいのに。」

と、思うもので溢れ返っている。ふと一番上の棚に目をやると、見慣れない木箱が二つ並んでいた。手を伸ばして取り出すと、輸入品のアスパラガスが入っていたと思われる木箱だった。

「何でこんな物が…。」

母に尋ねると、

「数年前に、行きつけの青果店で目に止まったからもらっておいたのよね…。」

「こんな物を取っておくから片付かないんだ。」と思い、捨てることをすすめたが、

「木箱の印刷と手書きの文字が輸入品って感じで、いいのよね。何かに使いたいんだけど…。」

と捨てる気がない母に呆れてしまった。

その時、夏休みの課題が頭に浮かんだ。アイディア工夫作品の製作、技術科の宿題だ。授業で、CDボックスを作ったことがある。一枚の板をのこぎりで切り、クギを打つ。ヤス

リをかけ、ニスを二度塗りする。蝶番、取っ手などを取り付けて完成させた。一つ一つが初めての経験で、根気のいる作業ばかりだった。完成させた時の喜びは、今までに味わったことのないものだった。その時の経験を生かせば、何か作れるかもしれない。

この箱をリメイクしようと決めた。母のために、台所仕事をおしゃれに効率よくしてあげたいと思った。

台形の木箱。すのこ状に付けられた木には、手書きでメモが書かれている。基本形を生かし、母が気に入っている印刷や手書きのメモはそのまま残したい。箱をいろいろな角度から眺めた。箱を横に置くと傾斜ができる。

「野菜ストッカーだ。」

蓋を取り付ければ中身が見えない。座って野菜の皮むきもできる。小柄な母の踏み台にもなる。

箱はホチキス止めで大雑把に組み立てられていた。まず、ホチキスの針をマイナストラ



中学校の部 最優秀賞 高橋和也さんの朗読

イバー、クギ抜き、ペンチを使って丁寧に抜き取った。目の粗い板はヤスリをかけ、クギを打ち直した。体重がかかる時の強度を考えて、一つの箱の間に板を挟んだ。蓋になる板は、父の日曜大工の残りから見つけた。板に線を引いて切ったのに、合わないこともしばしばあった。嫌になりかけたこともあったが、小学生の時、牛乳パックで作った小物入れを母の日にプレゼントしたことを思い出した。とても喜んでくれ、今でも台所で愛用している。母に喜んでもらいたい、という思いが原動力になった。箱の形が出来上り、ニスを二度塗りした。蝶番を取り付け、編んだ紐を穴に通して持ち手にした。母が気に入っていた輸入品らしさを残したスリーウェイボックスの完成だ。

八月二十四日は、母の誕生日。学校に提出する前に、母に渡したかった。

「誕生日おめでとう。」

と、完成したスリーウェイボックスを手渡した。

「ステキ。アスパラガスの箱だったとは思えないほどおしゃれなボックスに大変身したね。」

と、完成したスリーウェイボックスをととても喜んでくれた。母の笑顔と、その言葉が嬉しかった。

私たちは、お金を払えば様々な物を手に入れることができる環境で生活している。百円ショップでは日用品、雑貨、文具、玩具などの充実した商品を買うことができる。

「これも、百五円で買えるの？」

と、思うほどの気の利いた商品がたくさんある。その一方で、ゴミステーションには気楽に捨てられたものが溢れ返っ

ている。

「ものを大切に使いましょう。」

と、という言葉をよく耳にする。ものづくりの苦労と喜びは、ものを大切にする心を育ててくれる。ものづくりには、作りの心が一杯詰まっている。だから、お金では買えないオンリーワンのものを手にした人は、ものを大切に大切に使ってくれるのだと思う。

これから、素敵な材料との出会いを大切にして、ものづくりを楽しみたいと思う。

中学校の部 優秀賞

働くことは簡単ではない

新宿区立落合第二中学校 三年

大 中 璃 子

私は中学二年生の時、職場体験で助産院に行きました。助産院では、そこで働く方、妊婦さん、赤ちゃん、子育てに奮闘するお母さん、普段あまり関わることでできない方々と触れ合うことができました。私にとって、とても貴重な経験となり、「働く」ということについて深く考えるきっかけとなりました。

職場体験を通して、私は二つのことを学びました。

一つめは、人と人とのつながりの大切さです。体験中、診察に来た妊婦さんとお話をする機会がありました。たくさん話の中で、私が一番印象に残ったのは、助産院で産むことを決めた理由でした。妊婦さんは、私に笑顔でこう話してくれました。

「迷っていたんだけどね。ここには病院にはない温かさがあったの。すぐく親身になって話を聞いてくれて、ここなら、赤ちゃんの命を安心して預けられるなって思ったの。」

話をただだけでこんなにも人を安心させることができ、お互いを強く信頼することができるなんて、本当にすごいと思いました。

また、私は助産院の方にもお話を聞かせていただきました。私が、

「仕事をするとときに気をつけていることはなんですか？」と聞くと、

「話を聞くとときはしっかり目を見ることを意識しているの。それと、相手の立場になって自分ならどうしてほしいのかを考えて、みんなで協力して、妊婦さんが過ごしやすい、温かい、空間をつくることを心掛けているのよ。」

と言っていました。相手のことを一番に考えるという優しさが、人と人とのつながり、信頼関係をつくり、強くしているのだと思いました。そして、そのつながりがあって、一つの新しい命が無事に生まれてくるのです。改めて、人と人とのつながりの大切さを実感しました。

二つめは、努力をするということです。助産院では様々な仕事があり、それぞれが考えてたくさん工夫をしています。

た。特に、食事の仕事が大変そうでした。油や砂糖を一切使わない、野菜中心のメニューを考える、栄養がしっかりとれるようにする、彩りをよくする、毎日変化をつける、など助産院の方は苦勞しながらも楽しそうに作っていました。大変でも、みんなが「おいしい」と笑顔になってくれるのを見ると、すごく幸せになるそうです。私も実際に食べさせてもらいましたが、どれもおいしく、家庭の温かさを感じることができたものばかりでした。自分のために努力することも大切だと思いますが、人のために努力することで、相手はもちろん、自分も幸せになれるのだということに気づきました。

私の「働く」ということに対する考え方は体験前と後で大きく変わりました。以前は、「働く」ということは、自分の将来の夢、就きたい職業で、自分が好きなことを、自分が生きていくためにするものだと思っていました。だから〇〇になりたいとか考えていませんでした。しかし、「働く」ということはそれだけではないのです。決してたった一人でできることではなく、そこにはたくさんの人との関わりがあり、自分のことだけ考えていればよいのではなく、相手のことも考えながらすることなのです。そして、自分が苦勞したから、一生懸命やったことが相手に喜んでもらえるということは、とても幸せなことで、明日のやる気につながっていきののだと思いました。

私はまだ、将来どんな仕事をしたいか決まっています。しかし、一人でも多くの



人を喜ばせ、笑顔にできる仕事をしたいと思います。そのためにも、今まで、そしてこれからの人との出会い、つながりを大切にし、いろいろなことを経験していく中で、自分が「これだ！」と思える仕事を見つけられるよう努力していきたいです。

指物との出会い

練馬区立開進第三中学校 三年

大西直己

入学した中学校には、ほかの学校にはほとんど無い、珍しいクラブがあった。木工部だ。木を使って作品を作るクラブで、もともと、ものを作ることが好きで、小さい頃からよく工作をしていた僕は、すぐにこのクラブに入部した。

二年生の秋、僕を変える出来事が起きた。学校で伝統文化に触れる授業の一環として行った「箸作り体験」だ。作り方を教えるに来てくださったのは、江戸指物師の人たちだった。

「江戸指物」は、釘を一本も使わず全て木組みで作られていて、しかも組んだ部分が表から見えないように工夫してある東京の伝統工芸品だ。それを作っている人たちを「江戸指物師」と呼んでいる。

指物師の人たちは、それぞれ自分の作ったものを学校へ

持ってきてくださった。僕はそれらを見て、江戸指物のシンプルで上品なところに心を打たれた。そして、自分でも作ってみたいと思うようになった。

体験授業のあと、放課後、早速部活で設計図を描いて練習をしてみよう、と思ったが作り方がわからない。木組みが外に見えないようにするなど、今まで考えたこともなかったのだ。そこで、図書館へ行ってみたが、あまり資料はなかった。今度は、自宅のインターネットで調べると、指物師の人が作業をしている動画が見つかった。真剣に、無言で作業をしている姿は、とても格好良かった。何度か何度かその動画を見て、作業を真似した。ところが、何度真似をして木を組んでもうまくいかない。よく考えてみると、それは当然だと思った。職人さんたちは、長い間仕事を続けてきて、知識と経験が生かされるから素晴らしいものができるのだ。僕のような素人の青二才が同じことをしようと思っても、うまくいくはずがない。それでもできる限り研究したくて、よく動画を見てもみると、驚くことに職人さんは自分で作った道具をいくつも使用していた。職人さんたちには、同じものを正確に、いくつも作れることが要求される。そのためには、専門的な道具も必要となるのだろう。だから僕は、職人さんと同じような道具も作ることにした。できる限り職人さんの真似をしたかったのと、道具を作ることができなければ良い作品も作れないと思ったからだ。道具をしっかりと作るために、妥協はしなかった。

部活で道具を作り終え、いつものように指物についてインターネットで調べていると、興味深い情報を見つけた。「江

戸指物師による実演」。動画でしか見ることでできなかった職人さんの作業を、目の前で見ることができるようになって夢のようだ。すぐに親に頼んで、家族で行くことにした。場所は浅草にある、伝統工芸品を展示・販売しているところだった。入口の近くには、職人さんが実演をする時に作業のできる場所があった。

館内を見学していると、入口から一人のおじいさんが何気なく入ってきた。

「もしかして指物師の人かな？」

予想は当たっていた。その人は、作業場へ行くといきなり作業を始めた。無言で作業するのは動画と同じだったが、違うこともあった。それは、音だ。目の前で引き出しを削っている時の鉋の音が、とてもきれいだった。思わず見入ってしまった、気付くとあつという間に三十分が経っていた。

家へ帰り、職人さんの作業を思い出しながら、あることに気付いた。自分は、こんな一つのものに夢中になったことは、今までない。部活で作業をすることが好きだったとしても、自分で調べたり、専用の道具を作ったりするほどまでなんて、したことはなかった。つまり、指物は、僕の心にずっと残っていくものの一つなのだろう。

さらに気付いたことがもう一つある。僕が指物の道具を作るようになってから、自分の作るものに今までのよりも「こだわり」を持つように



なったのだ。これは良いことだと、僕は思っている。指物に出会えて、本当に良かった。そしてもっと腕が上がるようにこれからも頑張りたい。

笑顔のおすそわけ

東京都立白鷗高等学校附属中学校 二年

門 岡 春 花

「育む喜びを知ったこと」。七月末の新潟農村宿泊体験学習での、大きな大きな収穫だ。

訪れたホームステイ先の農家の方に連れられて、私達は野菜畑へと向かった。車を降りると、柔らかな優しい茶色が視野いっぱいに広がっていた。香ばしい土の香りと、生命力にあふれた緑の香り。東京生まれ・東京育ちの私には、それが新鮮に、力強く感じられた。

「じゃあ、ここのじゃがいも掘ってくれる？」

農家のおばあさんにスコップと手袋を渡され、いざ作業開始。じりじりと日の照りつける中、わずか数分で班のメンバー全員が汗びっしょりになっていた。掘っても掘っても、じゃがいも達は次から次へと顔を出してくる。ある程度収穫すると、今度は別の畑へ移動することになった。「まだ他にも畑があるなんて…すごいなあ」内心感心していると、さら

に多くの種類の野菜達が待ち受けてくれていた。ピーマン、ししとう、オクラ、ゴーヤ、なす、きゅうり、そして…。

「この、白い瓜みたいなのは何ですか？」

「これは“そうめんカボチャ”って言って、熟すと中がそうめんになるんだよ。」

私達はびっくりした。カボチャがそうめんになるなんて…。おばあさんは他にも、私達が知らない秘密を、たくさん教えて下さった。じゃがいもは天日干しすると甘くなること、きゅうりは成長するのが早いこと、オクラは逆さまに実がつくこと、エンピツなすはその名前と逆に、普通のなすより太っていること。たった一日で、自分がとても物知りになれた気がした。

とれたての瑞々しい野菜を車に積みながらふと、私は考えた。畑が二つもあって、これだけたくさん野菜があるのだから、きっと毎日の世話は大変な作業のはずだ。しかし、山地は天気が変わりやすい。昨日も大雨だったが、おばあさんは畑に行ったという。仕事が嫌になったことはないのだろうか。毎日、元気に働ける「エネルギー源」は何だろう？

答えは、その日の午後、農家の方達に質問する時間に分かった。友達が言った。

「農業の一番の魅力って何ですか？」

おばあさんは、すぐに答えて下さった。

「やっぱり、野菜を収穫する瞬間だね。前からずーっと楽しみにしてたから。それにね、とれた野菜を近所の人達に食べさせてあげたいんだよ。喜んでくれると、うれしいね。」

ああ、そうか。私は心の中でうなずいた。おばあさんは、

今日私達が体験した喜びを、何度となく味わってきたのだ。だから、世話が大変でも毎日続けることができる。実は、作業したのはほんの二時間程度でしかも収穫だけだったため、私が想像していた農作業よりもはるかに簡単なものだった。それでも、大きく、おいしそうに成長した野菜達を手にした時は、嬉しくてついはいってしまった。だから、自分が苦労して育てたものなら、喜びはきっと格別だろう。そして、もう一つ、自分のためだけではなく、誰かのために育てていることもエネルギーの源だ。おばあさんは、近所の人や家族の笑顔を思い浮かべながら作業しているのだと思う。「あの人達を喜ばせたい」という、思いやりの心と共に作業しているのだ。最終日、おみやげにもらった野菜をぎっしり詰めこんだ袋は、ずっしり重かった。

それ以来、母とスーパーに買い物に行く度、売り場に置いてある野菜がキラキラ輝いて見えるようになった。あの一つ一つに、育てた人達の愛情がたっぷりこめられていると知ったからだ。私達が体験した農業はほんの一部分だが、その大変さ・喜びを身にしみて体感することができた。もちろん、他の農作物にも同じことが言える。そうして育てられた作物は人々を喜ばせ、笑顔にするのだ。そう思うと、結果が得られるまでの苦労や努力を前向きに受け入れることができる。助走期間に喜びを見出せる。

宿泊体験の翌日の夕食。おみそしるの具は、私の収穫したじゃがいもだった。みんながばくばく食べているのを見て、誇らしく感じた。

「春ちゃんがとってきてくれたじゃがいも、すっごくおい



中学校の部 作文朗読中の会場風景

「いいね。」
話題の中心はじゃがいもで、農業体験の話で盛り上がった。
その時、ふと、おばあさんの笑顔を思い出した。土の匂いも
よみがえった。
「うちそうさま。」
いつもより大きな声であいさつをして、この声がおばあさん
達に届けばいいのに、と願わずにはいられなかった。

中学校の部 佳作

私の夢

愛国中学校 一年

横尾才咲

私の将来の夢は、看護師になることです。私は幼い頃から看護師という、人助けや人のお世話をする職業に、大きな憧れを持っていました。

私が看護師になりたいと思った理由は、いくつかあります。まず一つめは、テレビで看護師のドキュメンタリー番組を見たことがきっかけです。そのなかで、一人の看護師さんは、小児病棟を担当していました。その看護師さんは、入院している子供が注射や点滴を嫌がって泣いている時に、お人形などを使ってあやしたり、抱き上げたりしていました。私はその光景を見て、看護師さんの子供に安心してもらいたいという姿に心を打たれました。その番組の中で取り上げられた他の看護師さんは、夜中も働いていました。私は、夜遅くまで働いている姿を見て、自分の生活を犠牲にしてまで病気の子供のために働く看護師さんがいることに感動し、思わず涙してしまいました。

小さい子供が、大好きなお母さんやお父さんと離れて病院という見知らぬ場所に入れられ、なおかつ手術で痛くて苦しんでいる姿を見て、私は胸が痛くなり思わず目をそ

むけてしまいました。きっと、その看護師さんも同じ気持ちではないかと思います。けれど治療のために心を鬼にして、その子供を手術室へ送り出すのだと思います。そこには「この子を助けない」という強い気持ちがあるからだと思います。私もその強い気持ちを持ちたくて看護師になりたいと思ったのです。

もう一つ私が看護師になろうと決めた出来事があります。去年、私の大好きなおじいちゃんが手術をしました。朝突然、おじいちゃんは「お腹が痛い。」と言って、救急車を呼びました。おじいちゃんは痛がって苦しそうでした。そして、大きな大学病院に運ばれました。私もすぐに父と病院に行きました。おじいちゃんは苦しんでいました。私の目の前でお医者さんと看護師さんが脈を取ったり、点滴を入れたりして、おじいちゃんの体にいろいろな器具を取り付けていました。私は看護師さんの処置の早さに驚きました。お医者様が指示を出す度に、点滴を調整したり、取り付けた器具を調整したりしていました。おじいちゃんは手術をして、無事に成功し、その後二ヶ月入院することになりました。私は何度もお見舞いに行きました。私がおじいちゃんと病室で話していると、看護師さんが何度も来てくれました。体温を測ったり、脈を取ったり、優しく声を掛けてくれたり、あるときはおじいちゃんの体を拭いてくれたりもしました。

ある日、若い看護師さんが入ってきて、お風呂場でおじいちゃんの体を洗ってくれることになりました。その光景を見ていてとても驚きました。大好きなおじいちゃんですが、長い間お風呂に入っていない人を洗うのは抵抗があります。け

れど、その看護師さんは汗を流しながら一生懸命におじいちゃんを洗って下さいました。お風呂の大好きなおじいちゃんは気持ちよさそうでした。私は「すごいな」と思いました。

いよいよ退院するとき、おじいちゃんは担当の看護師さんにとっても感謝していました。手術を下さったお医者様よりも感謝をしていました。私はその時思ったのです。「苦しい思いをする患者を直接支えるのは看護師なのだ。」と。私はおじいちゃんの入院を通して、看護師の仕事の大切さを強く感じました。

看護師になるにはこれから一生懸命努力して、資格を取るための勉強をしなければなりません。そして実際、病院に勤務して「死」や「病気」と向き合うことが出来るのか、立ち向かっていけるのか、今の私には自信がありません。けれど、看護師になりたいという私の夢は変わりません。あの時、おじいちゃんの体を一生懸命洗ってくれた看護師さんの姿を目に焼き付け、絶対に看護師になるのだという気持ちで、夢に向かって歩み続けるつもりです。



大きく変わること

新宿区立牛込第三中学校 三年

戸田 百香

私は、中学二年生の時に、動物病院で職場体験をしました。幼い頃から、犬や猫などの動物が大好きだったことを理由に選んだ職場でした。

三日間の職場体験期間中は毎日、病院の前の掃除から始まりました。その頃はちょうど、落ち葉の舞う季節だったので、いつになっても終わらず、苦労をしました。それが終わると、病院の中も同じように掃除しました。病院の中は、動物達の毛が多くて時間がかかりました。掃除が済むと、入院している動物達が使用していたゲージにはってあるシートを取りかえました。シートをひっかいてしまい、ビリビリになったものは、ただでさえ毛が抜けていて大変だったのに、それ以上に大変でした。その後は、動物達が使っていた食器やタオル、掃除した時に使ったぞうきんなどを、一度、塩素につけてから洗いました。ここまでの仕事、開院する前に終わらせることです。診察室が使われるようになると、仕事はさらに増えました。診察が終わる度に、ゴミを捨て、消毒することが加わったからです。また、日によって違いましたが、動物達へのシャンプーやカットなどの仕事も加わりました。職場体験期間中は、ありませんでしたが、手術があると、ま

もに昼食をとれないことも、あるようでした。このように、ただでさえ仕事の量が多かったのですが、一つ一つの行動が大切な命にかかわってくる現場だったので、注意しなければならぬことも多かったです。たとえば、シャンプーの時、足を洗う際には、バランスをくずさないようにすることや、ドライヤーで毛を乾かす時に、つまずかないように、コードを腕に巻くことなどです。注意することは、一つの仕事に一つとは限らず、覚えきれなくて大変でした。

私は、『好きを仕事にしたい』と思っていました。なぜなら、自分の好きなことだったら、つらい仕事や、気が進まない仕事だったとしても、楽しいと思えるはずだと考えていたからです。しかし、職場体験先である、動物病院での仕事は、楽しいというよりも大変なものばかりでした。三日間の職場体験が終わる時には、動物達にひっかかれてしまったのか、塩素が原因であれてしまったのか、手がボロボロに傷ついていたぐらいです。その手を見た時、以前、先輩が

「大変って大きく変わると書くんだ。」

と、教えて下さったことを思い出しました。大変。それは、高等学校への進学や就職への道を一緒に歩むものだと思えます。つまり、人生の大事な節目に、必ずといってもよい程あらわれるということです。その節目で逃げてしまえば、今までと何も変わりませんが、向き合うことができれば、その後は大きく変わると感じました。

職場体験で、手がボロボロになるまで、仕事をしてみて、このまま、ダラダラと生きていくよりも、大変な思いをしても、変わりたいと思いました。そして、この思いが、私の

未来への踏み台につながっていくと感じました。

農業体験で得たもの

世田谷区立松沢中学校 三年

舟 橋 朋 央

東京とは格段に違う空気の中で畑の土おこしを始めた。

バスに乗って四時間、白馬まで来て農作業は嫌だな、と実は思っていた。せっかく修学旅行に来たのに苦手な虫に比べえながら土まみれになるなんて。

農家さんに連れられ畑までやってきた。しかし、いざ畑にはいると少し湿った土がふわふわ柔らかく、この土の感触にこれを大地というのか、と初めてに近い感覚を覚えた。こんなに間近で田んぼや畑を見たのは初めてでどこまでも広がっている景色にさっきまでのモヤモヤが消えていった。こんな一瞬で気持ち晴れるなんて、自然の力ってすごい！と改めて感じた。

早速、土起こしをやることになった。クワで土をやわらかくし、ならしていくのかと思っていたがそんな旧式なやり方ではなく、機械を押して土を起こし始めた。最初は難しかったが、コツをつかむと楽しい。でもこの広い畑を農家さんだけでやらなければいけないのだから人手が欲しいだろうな、

と思った。農家さんは手際良く、無駄なく作業していた。実際にやってみて暑くても寒くても毎日やり続けるのは体力的に辛いだろうな、と思った。少しの間ではあったが、農作業をやり、すっかりひと仕事終えた気分が宿舎へ戻った。

宿舎では、わら細工を教えて頂いた。わらを編むのだが、乾燥していて固く少しやりづらかったが束にまとめてみた。輪にして真ん中にカンを入れ、花をさすと素敵に飾れるそう。

農家さんの手を見ると、黒く日に焼けしわがきざまれている。東京ではあまり見ない手だ。厳しい自然の中で働いている人の手を間近で見つめの間に土が入ったことぐらいで気にしていた自分が恥ずかしくなった。そして、ごつごつしていて堂々としている大きな手を見たら、自分が小さく思えた。今回の修学旅行は、農家さんの宿舎へ泊めて頂いたのですが、このように交流を深めることができたり、農家さんの生活を間近で見ることができた。私達の朝ご飯の時には既に畑へ行っていて農家さんの朝の早さを改めて感じた。

食事には毎回そこで収穫されたものが出てきて格別な味わいだった。農家さんから、畑にいつも気をつかいとても大変だが、おいしく食べてもらいみんなの笑顔を想像していると力が湧き、頑張っていられる、とのお話を聞き、農家の方がいかに愛情を注いで食物を育てているかが直接お話を聞いた、農作業をしている姿を見てわかった。

暑くても寒くても農業に休みはない。自然を相手にするのは、そういうことだった。収穫のタイミングも自分の都合に合わせてくれるのではなく全て作物の顔を伺い作物次第で

ある。苦勞して自分が作った作物は我が子同然だ、と教えてくれた。このような話を聞くと尚更食べ物を粗末にできない、と思った。

私は今回の体験で、東京にいただけではわからない農業の大変さ、食べ物の大切さを実際にその場に行き、畑の土を踏み農作業に汗を流したからこそ知り得た、今まで何気なく食べていた野菜やお米が土作りから始まり、大変な作業と愛情を持って育てられていることがわかり、食べ物のありがたみを感じる事ができた。

私はあの土の感触と農家さんの手を忘れないだろう。そして食べ物に心から感謝することができ自分の成長できた。

相手になったつもりで

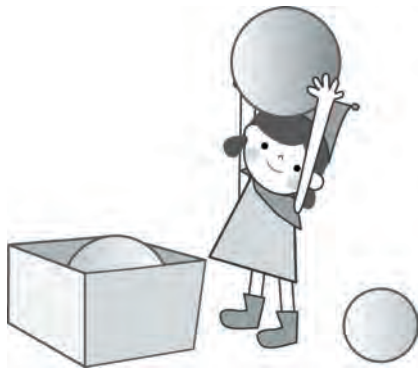
世田谷区立喜多見中学校 三年

沖山 槇之介

僕には友達と毎日生活する中でちょっとしたことで行き違ってしまった経験が何回もある。自分では相手のことを考えているつもりでも、相手のことを考えていなかったりする。自分の感情をコントロールできていないつもりでも、実際はできていなかったりすることがよくある。そう考えると、自分の身近な大人、両親や先生たちは感情をコントロールできて

いるようにも見え、すごいなぁと思う。そんな僕が、少しだけ相手を理解することについて大人に近づくことができたのは他でもない、職場体験のおかげだ。

三日間の職場体験で学ぶことは事業所や職種によってさまざまだと思う。僕がお世話になった事業所は「児童館」だ。僕は小学生の頃から児童館に遊びに行っていた。小学校高学年になると、遊ぶだけではなく、イベントのスタッフなどにも参加することが多くなった。それぐらい長い間お世話になったのだから、僕にとって児童館は「第二の学校」のようなものだった。いつでも遊びに行けて、行けば何か楽しいことがある。それは僕だけではなく、児童館に遊びに行く子どもなら、共通した感覚だと思う。何かやってみたいことがあったら児童館に行く。学校では勉強を教わり、児童館では遊びを教わる、そんな感覚だ。もともといろいろな人と関わることは好きだったので、職場体験先のリストに「喜多見児童館」を見つけたときは迷わず第一希望に選択していた。今になって思えば、その考えはかなり甘いものであったと思う。これまでイベントのスタッフなどで手伝ってきたことをそのまま三日間やればいいのかろう。そう思っていた。しかし現実とは違った。よく考えてみれば仕事として携わっている「職員」と、たとえスタッフであっても



遊びに行っている「子ども」の立場は明らかに違う。児童館の主役はあくまで「子ども」であり、それをそっとサポートするのが「職員」なのだ。それは三日間の職場体験でも当てはまることだった。

一日目は小学校の児童クラブのスタッフ体験に僕ともう一人の友達で行った。三年ぶりに行く児童クラブにはすでに授業を終えた何人かの小学生が遊びに来ていた。職員さんの紹介で自己紹介をしたとき、僕は緊張半分、喜び半分だった。しかし、仕事が始まると意外にも難しい仕事でこの仕事をしていることの喜びをかみしめている暇などなかった。何が難しいかというと、子供たち全員に「中立」の立場で、あるいは適度な「距離」がどの程度なのかを推し量ることだ。まさにそれが、「職員」として子供たちをそっとサポートする」ということだった。ただ問題なく遊んでいるときはそれでいいのだが、子どもの間で言い合いが始まったりすると、途端に「中立」が保てなくなる。それぞれの子どもは自分の意見が正しいと思っている。僕だってそうだ。友達とけんかをしてしまうと自分の意見を通そうとしてしまう。その気持ちがよくわかるだけに、なかなか言い合いを止められずに困ってしまう。するとすぐに職員さんが止めに入ってくれる。やっぱり職員さんはすごいなぁと思う一方で悔しい気持ちでいっぱいになる。落ち込む僕を見て職員さんはこんな言葉をかけてくださった。

「大丈夫、今できなくてもできるようになるよ。今は子供と一緒に楽しむことを大切にして。一番大事なことは三日間が終わった時には自然と分かるはずだから。」

この言葉に大きな力をもらった僕は、子どもには笑顔で接することを心掛けた。それは子どもとつながるための第一歩だった。

そして、僕は二日目に「一番大切なこと」を知ることになった。僕ともう一人の友達は児童館の工作室で木のおもちゃを作ることになった。一見そんなに大きな意味を持たないようにも思える作業だったが、実はこの作業にこそ「一番大切なこと」へのヒントがあった。職員さんは始める前にこう言った。

「作業中は児童館に遊びに来た子どもになったつもりでやってみて。」

正直その時は意味がよくわからなかった。それが、電動糸のこ盤やドリル、ベルトサンダーなどを使って作業するうちになんとなくわかってきた。例えば、このおもちゃ作りをイベントにするには今使っている工具は子供には危ないだろうとか、これは子どもたちにやらせてあげたほうが楽しいだろう、などだ。作業が終わってから職員さんはこういった。

「分かったかもしれないけど、児童館の職員にとって一番大切なことは『子どもの身になって考えてみる』ことなんだよ。大人と子供では出来る事と出来ないことの差が大きいんだ。」この言葉こそが「一番大切なこと」だった。

僕は職場体験の事業所に、児童館を選んで本当に良かったと思っている。なぜなら、相手——特に年齢の違う相手との関わり方を知ることができたからだ。相手とは子どもだけではなく、その保護者の方々や職員の方々もそうだ。そして、三日間を通して気づかされることがあった。それは、僕が今

まで「コミュニケーションをとれている」と思っていたのは一方的なものだったということだ。それでは相手のことを十分に考えているとは言えないし、本当の意味で理解しあうこともできない。だからこれからは「お互いに行き交うコミュニケーション」を目指したい。それは身近な人だけではなく、普段使っている物の製造者など、自分の生活をかげで支えてくれる人への感謝の気持ちを持つことにもつながると思う。もちろん、身近な相手も大切にする。やはり自分のつらい時を支えてくれるのは家族であり、友達だからだ。そのことをこれからの人生で忘れることはないと思う。そして、相手のことを考えられる温かい人になりたい。それが僕の夢の一つだ。

大工への道

世田谷区立喜多見中学校 二年

光 井 良 太

僕の将来の夢は大工さんになることです。なぜかという
と、僕は「ものづくり」が好きだからです。その工程は、面倒なことが多かったり、疲れてしまったり、うまくいかなくて諦めたくなることもあります。でも、その作ったものを見ると嬉しくなります。面倒だったこと、疲れたこと、諦めた

くなったこと、すべて忘れて感動とか達成感が湧きあがってくるのです。しかも、それを使っていて、使い心地がよかったり、長持ちしたり、誰かに喜んでもらえたときはなおさらです。だから、中学校に入ると技術の授業があると聞いたので、ワクワクしながら待っていました。

でも、授業が始まってみると、僕が思っていたものづくりと違っていました。

最初の授業では、先生がこれから三年かけて学ぶことを説明してくれました。安全上の注意など説明が多かったのを覚えています。

初めに作ったのが、ウサギのペン立てでした。まずは、先生が書いたお手本の設計図を見ながら、キャラクターの部分以外は全員同じペン立てを作りました。木材の切断、プラスチックの曲げ加工、くぎやねじを使った組み立ての作業を教えてもらいました。技術室での作業が始まると、とても嬉しかったです。自分の好きなことができるので、毎週楽しみました。仕上げるに、研磨しているときは、早く使いたいなあと思いました。そして、次に何を作るのかも楽しみでした。

でも、次はコンピュータ
ルームでの授業だったので
す。完成したペン立ての広告
を作るという授業でした。
材料費や人件費を考慮した
金額や製品の押しボ
イントを広告に載せまし
た。ただ載せるだけではな



く、どうすると情報の受け手に伝わるか、つまり「買いたい」と思ってもらえるかを考えました。それから、情報を伝達するときにはルールがあり、著作権や肖像権を侵害しない広告にしなければいけないことも学習しました。コンピュータを使つての作業にとまどつてしまうことが多かったけど、広告が完成したときには、早く誰かに見てほしいなぁという気持ちでいっぱいでした。

次の課題は、これまでの授業を踏まえて、設計から製作まで自分一人で行うというものでした。ペン立てのときは先生が設計図を書いてくれたので、設計の苦労はしませんでした。が、自分で書くとなるととても大変でした。特に大変だったのは、本棚の側面の板と底板の接合部分が5mmズレていることを先生に指摘されたことです。パッと見ただけでは、誰も気付かないくらいのズレでした。その一か所を直すのに、かき込んだすべての線を消さなければならなくなったのです。「これくらいいいじゃないか。」と思いました。どうせ作るのは僕なのだから、作りながら修正すればいいのではないかと思いました。そんな僕に、先生は「設計図の緻密さが、製品の緻密さにつながるんだよ。」と言いました。仕方なく、僕は修正することにしました。

このとき、ふと思ったことがあります。大工さんはこういうことも、面倒だと言わずにやっているのかな、と。大工さんの一般的なイメージは、体力勝負の仕事で、豪快な人というものではないかと思えます。実際、僕もそんな大工さんに憧れます。でも、大きな家の設計図を、小さな紙にかくのですから、相当細かな作業ができる人でなければやっていけない

い仕事です。しかも、ちょっとした本棚と違い、高額な買い物になるので、買手は慎重になるはずですよ。そんなとき、僕のように「これくらいいいじゃない。」という考えで家を建ててしまつては、お客さんは喜んでくれないと思います。僕が、その作ったものを見ると、面倒だったこと、疲れたこと、諦めたくなつたこと、すべて忘れて感動とか達成感が湧きあがってきたり、それを使つていて、使い心地がよかったり、長持ちしたり、誰かに喜んでもらえたときの気持ちを、お客さんに味わってもらうためには、緻密な作業を心がけなければならぬのではと思いました。

そう思ったとき、僕の作業に変化が生まれました。「設計図も製品も、誰よりも緻密なものにしてやる！」本棚が完成したときは、本当に嬉しかったです。

大工さんの仕事というのは、時間のかかることで、面倒くさくて、疲れたり、諦めたくなることなのかもしれません。それから、仕事が入るのを待っているだけでは、誰も頼んでくれないので、自分の商品や技術力を宣伝しなければなりません。そのためには、広告を作ることも必要かもしれません。だから、とても大変な仕事だと、つくづく思いました。でも、きつとそれだけやりがいのある仕事だと思っています。

将来、僕が大工になるための学びは、まだまだ始まつたばかりです。途中で、面倒なことが多かったり、疲れてしまつたり、うまくいかなくて諦めたくなることもあるかもしれません。でも、今のうちにたくさん学んで、カッコいい大工さんになりたいです。

物をつくる喜び

中野区立中野中学校 一年

神山 瑛理

私が初めてミシンを使ったのは、小学校一年生の時です。その時作ったのは、ランチョンマットです。家にあったランチョンマットは、作るのが簡単そうに見えましたが、作ってみると何回か失敗しました。完成した時は、すごく嬉しかったです。その後も手さげ袋を作ったり、ティッシュケース、カトラリーケースを作りました。クラスのお友達に作ってあげて喜ばれたので、また何か作ってプレゼントしたいと思うようになりました。手作りの物を作るのは、時間と手間がかかります。でも、自分で作った物は、世界に一つしかありません。お金を出せばティッシュケースや手さげ袋、ランチョンマットなどは、簡単に手に入ります。ですが、プレゼントする人のことを思って時間をかけて、ていねいに作ることは、とても大切なことだと思います。昔は、何でも手作りでした。自分の着る洋服や家で使う物は、全て作っていました。私の祖母は、手芸が好きでいろいろな物を作っています。ミシンも今は、あまり見られなくなった足踏みミシンを持っています、今でもときどき使っています。結婚した時に、買ってもらったそうでもう、何十年も大事に使っています。祖母も何かを作って人にプレゼントをすることが好きです。プレ

ゼントした時に、相手が喜んでくれるので、その顔を見ると嬉しくなるそうです。私は、物を作って相手に、プレゼントすることは、物だけでなく相手を思いやる温かい心をプレゼントしているような気がします。私には弟がいますが、私がミシンを使っているのを見て自分も何か作ってみたいと言ってカトラリーケースを作りました。弟は、カトラリーケースにスプーンやフォーク、おはしを入れて喜んでいました。難しい所は、私が代わりにミシンで縫いました。弟は、簡単にできる直線縫いをしました。自分で好きなキャラクターの布を選んで作ったので、とても気に入っています。弟のカトラリーケースを作って、思いやりが必要だと思いました。最初は、できなくても何度も教えてあげれば一人でできるようになるからです。今、私は、中学校の家庭科の授業でブックカバーのデザインを考えています。私は、本を読むのが好きなので出来上ったら、本にかけて、使おうと今から楽しみにしています。その前は、手縫いでふきんを作りました。針を指にさしたりしたけれど出来上った時は嬉しかったです。以前に、母が祖母からふきんをもらいました。そのふきんには、キッチンで使う鍋やスプーン、フォークがしゅうしてありました。母は、もったいなくて、使えないと、言って大事にとってあります。母は、手作りの物は、時間と手間がかかっているのでもとてもぜいたくな品物なんだよと、よく言っています。父から聞いた話ですが、日本の物作りの職人さんが今、少なくなってきたそうです。父は、昔からの物作りの技術が伝承されないと言っています。若い人達が後を継ぎたがらないそうです。力仕事が嫌だとか、朝早く起きるの

が嫌だとか、いろいろなことを言ってますぐやめてしまうそうです。この間、テレビで見たのですが、ハサミを作る職人さんの所にフランス人の若者が弟子入りしたそうです。そのハサミは生花に使うハサミなのですが、こんなに切れるハサミは、世界中探してもどこにも無いと言って弟子入りを決めたそうです。ハサミを作るのには、火を使うので夏は仕事場の温度が五十度位になってすごく暑いそうです。顔もさすがについて黒くなっていました。フランス人の若者は、それでもこのハサミを作る技術を伝えていかなくては、いけないと思いますそうです。ハサミを買ってくれた人がよく切れるハサミだねと、言ってくれた時が一番嬉しいそうです。職人さんは、自分の作った物を喜んで使ってくれる人がいることがはげみになるそうです。日本に古くから伝わっている物作りがなくならないと良いと思います。私は、物作りを通して、相手の事を思っ作るとい思いやりの気持ちでできました。これからも、いろいろな物を作っ、プレゼントしたいと思ひます。



私が思う職業観

荒川区立第七中学校 二年

田 中 千 尋

私には、将来の夢がある。それは、英語の言語学者と通訳だ。なぜ言語学者と通訳になりたいのかというと、英語が好きだからだ。六才から英会話を習っていて、単語や言葉を覚えていくうちにもっと英語について知りたくなって、この二つの職業に就きたいと思った。私にとって職業とは「趣味」や「生きがい」だと思っていた。大人になっても、好きなこととの英語だけはやめたくないと思っていた。

しかし、中学一年生のときだった。職場訪問という行事をきっかけに、自分の将来について考えることが多くなった。しかし、他の職業に就きたいと思うことはなく、英語の職業にしか興味を持つことができなかった。そこで思いうかんだのが両親だった。私の母と父は働いている。母は銀行員で、父は生花園芸小売業だ。二人とも働いているが、学生時代の将来の夢は聞いたことがなかった。だから二人に聞いてみた。「お父さんとお母さんには将来の夢とかなりたい職業はあったの。」

と。すると、父は野球の選手で母は薬剤師と言ってくれた。その答えを聞いたあと、

「じゃあ、なんでその職業に就かなかったの。」

と、聞くことは出来なかった。聞かなくても理由はなんとなく分かっていった。きっと、私や私の家族が生活していくためなんだと思う。生活していくため、生きていくためには共働きでなければいけない。それを今分かった私は、すごく悲しい気持ちと感謝の気持ちが混ざった複雑な気持ちになった。私が英会話を続けていられたり、毎日ご飯が食べられることも全て母や父のおかげだということは、忘れてはならないことを感じた。そして、このことがきっかけに分かったことがある。自分の職業観は生きがいや趣味であっても、それはあくまで理想であること。現実には、生きていくためになくてはならないことである。しかし、自分のなりたかった職業ではないと生きがいはないとは限らない。

今の社会、景気はあまり良くない。誰もが好きな職業に就いているわけではない。しかし、好きな職業に就けなくても決して仕事をしない、ということにはならないのには理由がある。その理由が分かったのが、今年の夏休みにあった勤労留学という行事だった。私は、印刷工場に行って職場体験をしてきた。その体験期間中に、工場内にある食堂の職場体験もしてきた。そこで体験してきたことは、工場内で働いてる人のための昼食作りだった。調理場は暑いし、野菜も上手に切れず上手くいかないことが多かった。しかし、働いてる人たちが食べている姿や、笑顔で、

「ごちそうさまでした。」

と言ってくれるとすごくうれしかった。心のなかで達成感を感じることができた。苦手なことや難しい仕事でも、誰かがそういった感謝や喜んでくれるだけでも、仕事をやっている

ときと後では全く違う。どんな仕事でも、必ず誰かのためにやることで全然違い、それが身近な人や家族だともっと違うんだろうなと思った。

たとえば、現実が「生きていくためになくてはならないこと」でも、その言葉の裏にはちゃんとした意味があることを、この勤労留学で学んだ。

現在の社会は、前にも言ったように景気はあまり良くない。有名な大学を卒業していても必ず職に就けるわけではない。そんな世の中で生きていくのは、すごく大変だと思う。私も十年後には社会の中に入って、母や父の様に働いているだろう。もし、そのとき自分がなりたかった職業に就けていても就けていなくても、誰かのために一生懸命仕事をしている自分であってほしい。そのためにも、英語だけではなく、英語以外のこともたくさん経験して学んで、そこで感じたことを全て自分のものになりたい。できるだけ多くのことを、好きなことにつなげたいと思う。そして、たとえば現実が「生きていくためになくてはならないこと」でも、その言葉の裏にある本当の意味を自分の生きがいに変えたいと思う。これが、私の職業観だ。



今からできる仕事の基本

練馬区立中村中学校 二年

高崎野乃子

私は中学一年生るとき、読書が大好き、という理由で、図書館での職場体験をさせていただきました。たくさんのお話を学びましたが、そのうちの四つについて話したいと思います。

一つめは、接客の体験をさせていただいたときに起こったことです。本を借りるときに苦情を言いにきた人がいました。その人は、図書館にある、本を貸し出す機械についての苦情を言っているようでした。しかし、その話は筋が通っていない上、同じことを何度も繰り返し言っていました。それにも関わらず職員の方は、その人の話を最後まで聞き、一から何度も説明をしていました。私は、大変そうだな、と思いました。その人は最後は納得したのか、帰っていききました。職員の方が、相手の話に耳を傾けたり、分かりやすく話していたりしたからだと思います。

このように、話をしっかり聞き、分かりやすく話すことは、どんな職業にも共通して必要なことなのではないか、と思います。一方的に話すだけでも、ただ聞いているだけでも、相手は納得してくれないと思います。

二つめは、利用者の方には知られていないような仕事です。私の住んでいる練馬区には、本の予約について、便利な

制度があります。それは、利用者の方が予約した本がその図書館にない場合には、区内の他の図書館から取り寄せて、貸し出しをできる、というものです。図書館では、予約された資料を毎日朝と夕方に、メール便でやりとりをしています。まず、区内全域で予約された資料を、本棚や一般の人は入れない、本のたくさんある閉架などから探し出します。次に、その本を予約した利用者の方が、どの図書館で受け取るのか、仕分けをして送ります。また、届いた本は、受け取る人が誰かを確認して整理し、利用者の方に、素早く渡せるようになっています。私もよく、図書館で本の予約をします。しかし、まさか人の手でやっているとは思わず、とても驚きました。これからは、していただいたことへの感謝を持って、本を読みたいと思います。

他にも、本のページを何人もの人が何重にもチェックしています。ページがとれていないか、破れていないか、何かはさまっているか、何人もの目で確認をします。

この二つは、どちらも利用者の方に満足していただくことと、利用者の方が図書館を利用しやすい環境を作る、ということだと思います。

三つめは、働いている職員の方々の様子を見せていただいたときに気がついたことです。職員の方は、自分の作業が終わった後、休けいをするのかと思っていました。しかし、実際は自分の作業が終わると、他の人の作業を手伝ったり、代わったりしていました。これは助け合いだと思います。職員の方全員が協力することが、良い図書館を作り上げているのだと思います。

私は、体験させていただいた仕事が終わったら、担当していただいた方に、

「終わりました。」

と報告をするだけでしたが、せめて、

「終わりました。他には何をすれば良いですか。」

と聞けるとよかった、と思いました。

四つめは、私が一番緊張した接客についてです。職員の方はみな、笑顔で真心のこもった接客をしていました。私も接客の体験をさせていただきましたが、緊張のあまり声も小さく、笑顔で対応することができませんでした。

なぜ笑顔で真心をこめた接客をするのでしょうか。私の考えは、人とつながるために必要な「笑顔」での対応で、お互い気持ち良くなれるように、だと思います。笑顔での対応は、相手も笑顔になります。また、そのことによって、公共の図書も大切に扱ってくれると思います。きれいな本は、その本を借りた人も、その次に借りた人も、気持ち良く利用できるのです、笑顔の輪が広がります。利用者の方のため、というのはいつでも同じだと感じました。

以上の四つから、私はたくさんことを学びました。仕事をしていく上で必要になるのは、特に笑顔・人の話を聞くこと・人に伝わるように話すこと・人への心づかい・助け合いだと思います。これらのことは、今からでも心がけられることであり、どの仕事にも共通して大切なことだと思います。そして、学校生活を気持ち良いものにするためにも必要なことです。この五つを意識した生活をして、社会人になるための経験を積んでいきたいと思います。

創造ものづくりフェア

INTOKYO

足立区立第六中学校 三年

村山 ほか

私は中学一年の時からパソコン・工作部に入っています。部活内容は種から稲を育てたり綿花を育てたりしましたが、中でも一番思い出に残っているのが、二年生の時に参加した「ものづくり競技大会木工チャレンジコンテスト」です。私は競技大会参加にあまり積極的ではなかったのですが、同じ部活の友達に誘われて仕方なく、という感じで参加を決めました。参加が決まってから、部活では一次課題のブックエンドを作業時間内に作る練習をしました。最初はなかなかうまく作れず、少し曲がってしまったり作業時間内に終わらなかったりしましたが、何回も同じ物を作っていくにつれ、自分でも納得のいく綺麗なブックエンドが作れるようになりました。同じ人が同じ物を作っているのに、うまくいったり失敗したりで、少し違うものが出来るのが手作りの良い所ではないのかと思いました。また、うまく出来ずに時間がかかり、やっと完成した時の達成感と喜びはものづくりならではのと思っています。

ものづくり競技大会に参加することでいろいろな工具の使い方も覚ええました。かなな、ノコギリ、かなづち、ノミ、や

すり、さしがね、木材を固定する道具など、普段は使う事のない工具の使い方を覚える機会になって良かったです。千寿桜堤中学校で予選大会が行われ、練習の効果があったのか最優秀賞を貰う事ができました。本大会は都立工芸高等学校で行われ、初めて入る高等学校の雰囲気にとっても緊張しました。一次課題ブックエンド（作業時間四十分以内）、二次課題棚（作業時間百八十分以内）という内容でしたが、ブックエンドはうまく作れたものの棚の練習が足りなかったせいかな隙間が出来てしまい、納得いくものが出来ませんでした。それでもブックエンドの評価が良かったので三位に入賞することが出来ました。私はもう少し棚の練習をしておけばと思いますが、ものづくり競技大会への参加をきっかけに、いろいろな工具を知り、作り上げる楽しさを感じることが出来たので、最初は仕方なくでしたが自分にとって良い経験になり、今は参加して良かったと思います。

木工を体験して、普段の生活の中で木製の物が結構あることに気付きました。テーブルやイスやタンスなどの家具の他に、木造の家やお寺などの、豪華な彫り絵が入った欄間など、使い道にあった木の種類が選ばれていて昔からの知恵が現代にちゃんと使われていることに感心しました。私は、木工チャレンジコンテストをきっかけに木工は好きな方だと感じたので、これからも機会があれば何か自分で作ってみたいと思っています。詳しい知識がないとちゃんとしたものは出来ないと思いますが、小さめの家具から始めて最終的には木を組み合わせて作るログハウスを作ってみたいです。東京のような都会では、近代的な高層ビルが増えています、自然の物で

作ったログハウスは心が和み、落ち着いた感じで好きだからです。ものづくりと一言で言っても、最新技術を使った近代的、未来的なものから、歴史的文化建造物のようなものまでいろいろありますが、それぞれにあった技術で作られていることがすごいと思います。創造ものづくりフェア参加のように、何かのきっかけで全く知らなかったことを体験したりすることは将来に役立つかもしれないし、これから少し苦手だと思いうことでもがんばって体験していきたいと思っています。

私の将来

足立区立第六中学校 三年

杉 浦 結 奈

私の将来の夢は、小学校の先生になることです。さらに言い足すと、誰からも好かれて尊敬されるような先生になることです。

私がこの夢を決めたのは、小学校六年生のときでした。もともと小さい子供が大好きだったので、一番の決め手となったのは、担任の先生との約束でした。

小学校五・六年生のとき、先生方の中で一番長く学校に勤めている、いわゆる「ベテラン」の先生が担任になりました。最初は、こわい印象が強くてなかなか話せませんでした。

が、少しずつ話していくうちに面白い先生だということが分かり、いつの間にか先生のことが大好きになりました。そんな先生は、家庭科が得意で料理手芸クラブでお世話になったことがあります。料理もお裁縫もさっと出来て、先生の凄さを改めて感じたのを今でも覚えています。

卒業が近づくと、「将来の夢」について書かされました。私は小学校生活が楽しかったからというあまり深い理由もなしに「小学校の先生になりたい」と書きました。それを見た先生は、

「絶対なれよ。」

と言ってくれました。その表情から嬉しそうにも見えませんでした。私が小学校の先生になりたい理由はこの時から「先生と約束したから」に変わったのです。

もし、私が先生になれたら生徒達と仲良く授業をしたいです。廊下ですれ違えば笑顔で挨拶をしたり、悩みがあればすぐに相談してくれたり、そんな信頼性が生まれたらいいなと思います。しかし、いけないことをしていたら注意をしなくてはなりません。悪いことをしていたらそれはダメなんだよとしっかり教えてあげられるような、メリハリのある先生になりたいです。

でも、想像だけでは夢は実現しません。せっかくできた夢を叶えられるように、少しずつではありますが、自分なりに努力しています。

まずは勉強です。勉強を教える立場になるためには人に説明できる位、勉強の内容を理解するということが大事になってきます。私は社会科が苦手なので何度も何度も繰り返し復

習をして、どんな問題を出されてもすぐに答えを返せるようにするのが目標です。

次の課題は性格です。私は極度な人見知りで、初めて会う人とは全く話が出来ません。声が出なくなってしまうのです。だから、これから「高校」という新しい世界に入っていく中で徐々に克服していこうと思います。あまり無理して話し掛けるのではなく、自然に声を掛けられるように頑張りたいです。

他にもまだまだ課題だらけですが、その時その時に応じて乗り越えていこうと思います。まだ自分自身が中学生なので、明確には決まっていますが、大まかに自分の進む道は分かって来たので、一步一步確実に歩んでいきたいです。

先ほど話した先生は、私が中学一年生のときに亡くなりました。いつか、大きくなって立派に教師をしている姿を見せたかったのに、とすごく悔しい気持ちでいっぱいでした。でも、今では私たちのことを見守ってくれているんだと思えるようになりました。

私の大好きな先生のようにになれるかは分らないけれど、頑張って近づいていきたいです。そして、いつか「先生みたいになりたい」と言ってもらえる日が来るように、日々努力をしていきたいです。



職場体験を通して学んだこと

葛飾区立堀切中学校 三年

山 本 魁

「職場体験」とは何を目的として行われているのかを、皆さんは考えたことがありますか。その答えは人によって様々であり、沢山の理由が考えられます。「職場体験」とは、仕事をするこの大切さや、仕事をやり終えた後のうれしさ、達成感を感じることを目的として、行われていると思います。

僕は、去年の夏に三日間の職場体験に行きました。体験先は、面白そうという理由で選んだ、「葛飾FM」というラジオ局でした。ラジオ局では、どのような仕事ができるのか、すぐく待ち遠しかったです。

そしてついに、待ちに待った職場体験の日がきました。朝の十時頃に着き、ラジオ局内に入ると、すでに生放送の準備が始まっていました。邪魔にならないように、緊張しながらも挨拶をすると、担当の金子さんや、スタッフの方々が笑顔で迎えて下さいました。

その後、生放送に出演する人はそれぞれ練習を始めました。それを見ていた僕は金子さんに、「三日目には君達にも出演してもらうよ。」と言われました。僕はそれを聞いて、驚くと同時にすぐく緊張してきました。でも、めったにない機会なので、精一杯頑張ろうと決めました。

それから僕は、長い原稿を短くして、読みやすい文章を作るという練習をしました。この練習は、生放送で原稿を読む時に、短い文章でわかりやすくまとめて伝えるために、大切なことだそうです。実際に挑戦してみると、思っていたより難しく、まとめるのにすぐく時間がかかってしまいました。原稿ができたら、次は読む練習をしました。ここでは、大きな声で相手が聞きとりやすいように話すのが、ポイントだそうです。何回も自分が書いた原稿を読み返して、沢山練習しました。

その後、一人ずつ原稿を読んで録音し、皆で鑑賞しました。自分ではすらすら読めているつもりでしたが、録音したものを聞いてみると、少しつかえていたり、聞きとりづらい部分もありました。でも、金子さんがアドバイスを下さったおかげで、前よりも上手に読めるようになりました。僕はこの時、ここで働いている人達は、どのくらいの時間をかけて上手く読めるようになったのだろうと疑問に思いました。

一日目において、この職業の大変さを実感しました。

二日目は小説、「ハリー・ポッターと賢者の石」の一部分を皆で読み合わせました。一人一人役割を決めて、各自何回も練習をしました。途中、金子さんが感情の入れ方について、アドバイスをくれ、お手本も見せてくれました。それは僕達が練習していたセリフとは違う、全く別のセリフのように聞こえました。

その後、いただいたアドバイスや、見せていただいたお手本をもとに、練習を再開しました。皆教えてもらったことを意識して練習をしたため、段々上達していきました。

それから最後の練習を終え、一日目と同様に録音し、皆で鑑賞しました。けれど、でき上がった作品はあまり面白くない、皆顔をしかめていました。しかし、それを見ていた金子さんが、その作品に合った音楽をつけてくれました。その後、作品をもう一度聞いてみると、前とは印象や雰囲気も変わり全く別の作品に思えました。音楽を入れるだけで印象が変わってくるから、「すごく面白いな。」と思いました。同時に、音楽の大切さをこの時学びました。

二日目において、この職業の面白さを実感しました。

最終日の三日目は、ずっと心待ちにしていた生放送に出演しました。僕は午後の四時からの出演で、三日間職場体験をした感想を発表することになりました。そのため、一人一人発表する内容を考え、原稿を作りました。僕はこの時、一日目に教わったことを活かして、原稿を作っていました。

でき上がった原稿は、最後に金子さんにチェックしてもらい、数ヶ所訂正した後練習に入りました。練習では、一日目に教わったように、大きな声で相手が聞きとりやすいように話すことを意識して取り組みました。

それから時間が刻一刻と過ぎていき、本番が段々近づいてきました。

僕は最後の練習を終え、スタジオの中に入りました。そこではすでに生放送が始まっていました。生放送出演まで、残り十分。その間、発表する順番をじゃんけんで決めることになりました。その結果、僕は一番最初に発表することになりました。

緊張が深まる中、ついに出演が回ってきました。スタッフ

の方の合図により、僕はスピーチを始めました。適度な声の大きさ、速さで相手に聞き取りやすいように、感情をこめて原稿を読み上げました。途中、つかえそうになりましたが、後の文で何とかカバーできました。読み終えた後は、緊張が一気にとけ、少し楽になりました。僕はこの時、ここで働いている人達は、毎日このような経験をしているから、「すごいな。」と思いました。

その後、友達の発表も終わり、再びスタッフの方が生放送で話し始めました。この時周りを見渡すと、皆緊張しているようには見えず、リラックスしていました。話しているスタッフの人も、全く緊張しているようには見えず、すごく楽しんでるように見えました。この仕事を何年も続けていれば、本番でも緊張しないのかと、僕はこの時思いました。

三日目において、この職業のすごさを実感しました。

将来僕は、ラジオ局で働くかどうかはわかりませんが、この三日間職場体験を通して学んだことを生涯忘れず、社会人として実践していきたいと思います。



責 任

葛飾区立一之台中学校 二年

齋藤優里奈

仕事とはどういうものだろうか。この疑問についての答えは、きっと職種や考え方によるだろう。しかし、私は、どの職であっても、一番大切なことは人とのコミュニケーションであると思う。コミュニケーションは、人と人との間に行われる意思の疎通であり、これが不足しては、接客業は成り立たない。接客業でなくとも、先輩、後輩とのやりとりなどでも重要になる。というのも、一つ一つの会話が相手に自分の印象を与えるからである。私が先日、体験に行った先は、コンビニで、それがよく現れていた。お客様への対応力、これはコンビニでは必要不可欠なのだとよく思い知った。それは職場体験中に、店員さんが、おでんの汁をお客様にとばしてしまったのだ。そのとき、店員さんは、相手の目を見て言ったのだ。「すみません。」と。私は、ごまかしのないとはこのことだと店員さんの顔を見て思った。一方、体験生である私は、お客様に「この商品はないんですか。」と聞かれ、戸惑ったものだ。店員さんの、誠心誠意さは、慣れなのかも知れないが、私は、仕事に一生懸命な人だと受け取った。

この印象こそが、その店、あるいは会社の印象までもを左右することだってある。だからこそ、コミュニケーションは

大切だと思う。私は、ここまで考えて、あの一生懸命な店員さんは、これを理解していたのだと感じた。自分は、今この店の看板を背負っている、と、自分が汚している看板はない、と考えたのではないだろうか。それが例えばバイトであろうと、体験生であろうと責任に変わりはない。しかし、体験生を指導するのは、やはり店員さんであり、体験生が失敗すると店員さんの責任になっていたかもしれない。体験生は逆に、中学校の評判とその店の評判という責任を抱えていたことになる。さすれば、私の行動は軽薄で二つの評判を下げていくのかもしれないのだ。

こういった職場に対する意識を高めることによって店員さんは、誠心誠意さを会得したのかもしれない。しかし、どのようなにして意識を高めたのだろうか。私が思うに、何か鍵があったのではないだろうか。仕事に対する意識を高める鍵が。私が、店員さんの誠心誠意さを鍵として、扉を開けたように、店員さんにもきつとあったはずだ。

そこで私は、ふとある光景を思い出した。それは、品物が入荷したとき、人が荷物を運んでくる光景だ。トラックで輸送されたものを検品して品出しする。これは至って普通のことのように思う。しかし、私は、間接的ではあれ、多くの人間が関わっていると考える。例えば、商品を作って売るまでの過程だ。まず商品を作る人、次に輸送する人、品物を出して売る人、最後に消費者だ。これ以外にも、多くの人が関わっているだろう。後は、このつながりに対しどのように考えるか、だ。私は、こんなにも多くの人が関わっているのに対し、定価が百円などで売っているおにぎりを見ると、この

一つの商品を売ることで、これに関わった人が少しでも報われると思う。逆に、先ほどの責任を甘く考え、商品が売れ残すほど、責任は重くなる。なぜなら、不幸になるのは、その人だけでなく、周りの人、関わった人全ての責任を抱えることになるからだ。売った分だけお金は入る。しかし、売らなければ、自分だけでなく周りの人まで巻き添えになるのだ。そう考えると、さらに一人の責任は大きくなる。

だからこそ、仕事は大変だと口癖のように大人は言うのだろう。コミュニケーションでの責任、利益での責任など仕事とは責任のかたまりなのかもしれない。それがどういう職種であれ、突き詰めれば責任という大きな重要性のあるものになるのだろう。どんな仕事でも責任は大きくて重い、これは変わりのないことなのだと思う。私たち学生が仕事の責任についてしっかり考えられる大人になるには、学校で普段から責任を抱え、物事をよく理解していくしかないのだろう。



職場体験を通して学んだこと

調布市立第四中学校 三年

吉 井 季 里

「五日間、ありがとうございました。」

心の底からお礼を言うことができました。中学二年生の頃に行った職場体験でのことです。

私は看護師さんの仕事を体験しました。学校の中で数名しか体験できず、難しい仕事ということで立候補する人が少ないという現状でした。そんな中で、私は看護師さんは笑顔で優しく、人の役に立っている素晴らしい職だと思い、思い切って立候補することにしました。

体験一日目、少し大きなナース服を着て、気合いが入りました。しかし、会ったことのない人、ナース室の見たことがないような光景、器具を見て、とても緊張しました。朝から大忙しの中、初めに患者さんにあいさつをしました。勇気を出して、

「おはようございます。お体はどうですか。今日から五日間、よろしく願います。」

と言いました。家族や友達と話す時とは全然違って少し声が震えてしまいました。さらに、寝たきりの患者さんにとって私の声は聞きとれなかったらしく、看護師さんが私の代わりに伝えてくれました。その時、自分の気持ち、言いたいこと

を伝えるのはこんなにも難しいことなのか、と思ってしまいました。でも、相手に伝わらなければ意味がありません。あいさつはコミュニケーションをとる第一歩であり、大切なことです。あいさつに対する意識が変わった日となりました。

体験二日目。慣れない環境からか、疲れが出てきてしまいました。しかし、疲れた顔を見せず、看護師さんは精一杯患者さんのために働いています。その姿を見て、私も笑顔で患者さんに接することに決めました。あいさつも一日目に比べ、自分なりのあいさつをたくさん交わすことができ、気持ちが良くなりました。また、一日目から私は仕事を与えられます。氷まくら作りと血圧計を使って患者さんの血圧をはかることです。仕事を与えられた嬉しさ、できるかどうか不安な気持ち、戸惑い、挑戦できる新鮮さなど様々な気持ちでいっぱいでした。しかし、いざやってみると、焦って氷を落としてしまい、量が足りなくて、血圧計は逆にして使ってしまったりと、本当に情けない自分でした。上手いはず、汗が体中から湧き出てきて、申し訳ない、ごめんなさいという気持ちでした。怒られてしまうのか、と思っていたけど、看護師さんは親切にやり方を教えてくれて、アドバイスもしてくれました。その時、わからないことは自分でしたっけ聞いて自分のものにしていくことが大切だと思いました。恥ずかしがらずに聞こう、今の生活でも自分に言い聞かせています。

今回、私が行った仕事はそれほど重くなかったけれど、一つ一つ仕事には責任があります。看護師さんの仕事は命にかかわる仕事なので、失敗は許されず、Wチェックなどを行ってミスを減らします。その時、人の役に立つためには責任を

持ってやり通さなければならぬと改めて思い知らされるのでした。私が想像しているほど、簡単ではありませんでした。だけど、ただただ私も人の役に立つ仕事をしたいと思うのでした。

そして、三日目、四日目があったという間に過ぎ、最終日。一番印象に残っています。患者さんが退院する場面です。

「今までありがとうございました。お世話になりました。また、元気な姿を見せにきます。」

と患者さんが言って、看護師さんが嬉し涙を流している場面。でも、どこかさみしそうでした。なんだか、胸が痛くなり、そのような場面を見られて感動しました。私の祖父も食道癌や脳梗塞になり、手術に成功し、退院していく姿を見ていたので気持ちが分かります。看護師さんはこのようなやりがいを感じられる仕事だと思いました。患者さんのつらそうな姿、体が良くなって安心してある姿など、日に日に変わる姿を見て、看護をしなければならぬ仕事は大変です。時には生と死と向き合わなければいけないときもあると思います。でも、すぐくやりのいを感じられると思いました。

将来、私はどんな仕事につくのでしょうか。それは未来の自分しか分かりません。漠然とした夢はいくつかあるけど、まだまだはつきりとは見つけれられていません。でも、職場体験を通して、看護師さんの一生懸命さ、真剣さ、思いなど感じながら、将来の自分を思い浮かべることができました。人の役に立てる、助けられること、それがどれだけ素晴らしいことなのか分かったので、私もそのような職につけるよう、日々経験を積んでいこうと思います。

心に残る言葉

東京都立白鷗高等学校附属中学校 二年

峯 琴 子

私にはイナカと呼べる場所がない。この場合のイナカとは、都会の対義語である田舎と、自分もしくは親の実家という意味を合わせた言葉だ。東京で生まれ育ち、両親とも実家が車で一時間以内の所にある私にとって、いわゆる農村の風景は映像や写真でしか見たことがなく、自然豊かな風景に何となく憧れを抱いていた。

民泊先の佐藤さんの家に着くと、私が期待していた通りの景色が目の前にあった。空の青さとそこに映える山の緑。そしてそれらが混ざり合って溶け出したような畑と田んぼが見渡す限りに広がる。シンプルだけれども美しい景色だった。

景色だけではなく、東京では決して体験できないことをたくさん経験させてもらった。夜にはホタルを見ることができたり、何と言っても、採れたての野菜のみずみずしい美味しさは格別だった。ありきたりだが、「自然の恵み」という言葉がびったりだ。

しかし、農作業の手伝いは思ったよりも難しかった。佐藤さんのおばあちゃんに色々教えて頂きながら、様々な野菜の収穫の手伝いをさせてもらった。そこには映像や写真には決して映らない、生きた自然の姿があった。

キュウリにはトゲがある。知識としては知っていたが、実際に触ってみると予想以上に鋭く、うっかりトゲのある部分を握るとかなり痛かった。間引きするトウモロコシの根は土をしっかりと掴んで、見かけによらず抜くのが大変だった。それはそうだろう。キュウリにしてもトウモロコシにしても、むぎむぎと人間に採られたり、引っこ抜かれたりするために生まれてきたわけではない。

その日の夜は蒸し暑く、皆で話して網戸にした。かすかに土の匂いのする心地よい風が入ってきて、涼しかった。その代わりに、網戸の外側一面にびっしりと蛾の大群がはりついていて。正直言って虫は苦手なので、網戸を内側からパンパンと叩き、自然に対する私の憧れは、蛾と共に去って行った。翌日、朝食を食べて作業の準備をし、外に出ると、前を歩いていたおばあちゃんが、

「ああ、やられた。」

とつぶやき立ち止まった。何が起きたのか分からずおばあちゃんの視線の先へ目を向けてみると、昨日整えたばかりの畑が荒らされていた。おばあちゃんの話によると、犯人はタヌキやカラスで、時にはイノシシが来ることもあるそうだ。ニュースでしか見たことがないことが現実にも目の前で起こり、自然との近さを感じた。

私たちが、カラスやタヌキを追い払うことはできないのか、と尋ねると、

「無理矢理そうする必要はない。ここは日本の中では珍しく、動物たちと人間の力関係がどちらにも偏っていないから。」

とおばあちゃんは当たり前のように答えた。

意外な答えだった。東京では、ごみ集積所に群がるカラスでさえやっきになって追い払っているというのに、せっかく育てた野菜を横取りされるのは悔しくないのだろうか。自分が育てたわけでもないのに、何か釈然としない気持ちのまま、その日は作業を終えた。

帰りのバスの中、窓の外をぼんやりと眺めていると、ふと昼間の釈然としない気持ちの正体に気がついた。私はまるで、あの網戸のようだ。自然の嫌なところは拒絶して、いいところばかりを受け入れようとしている。

私に限った話ではない。人間は山を切り開き、川を汚し、海を埋め立て、一方で都会の道路に街路樹を植え、声高に自然保護を叫んでいる。人と自然との関係は難しい。

ただ忘れてはならないことは、人は自然に頼らなければ生きていくことはできないということだ。野菜や米に限らず、肉や魚も食べるものは結局のところ自然の中から手に入れるしかない。技術がどんなに進歩しようとも人間も自然の一部であるということだ。一部で

ある人間が自然に対して憧れたり、拒絶したりするのは何かおかしい。ましてや保護などという言葉は似つかわしくない。

本来、生きものが生きていくために必要な食べ物は、自然界の絶妙なバランスで与えられるべきものだ。ところが人間は、



自然を利用しながらも自らの手で食べ物を生産している。それは自然に対する挑戦だ。食べものを作ることは、自然と直接向き合うことだ。

先日、近所にある行きつけのスーパーへ家族で買い物に行った。入口入ってすぐのところに、いつものように野菜がたくさん積まれていた。いつもと違うのは、佐藤さんのおばあちゃんの顔を思い出したことだ。この野菜たちの一つ一つに収穫した人がいる。キュウリのトゲに刺され、カラスやタヌキに畑を荒らされながら育てた人たちがいる。人の営みの最前線からの贈り物を、大切に食べようと思う。

農業体験で収穫したもの

東京都立白鷗高等学校附属中学校 二年

遠 嶋 美 月

七月の終わり、私は新潟へ向かうバスに揺られていた。これから始まる農村宿泊体験を、私はとても楽しみにしていた訳ではなかった。初めて会う人の家に行って農業を体験してくる、と聞いただけでは、楽しそうという気持ちは起こらなかった。

そんな感情を半ば抱えたまま、私は体験先のお宅に到着した。そこで私が体験したのは、野菜の収穫作業だった。その作業をした畑というのが、一見家庭菜園のような印象を受け

るのだが、そんなものではなかった。畑を案内してくださったおじさんは、「これはブドウだよ。」とか、「こっちは種類が違うトマトなんだ。」とか、次々といろいろな野菜の名前を口にしていた。周りを見ると、本当にたくさんの緑に囲まれているけれど、よく見ると種類がみんな同じではない。その光景にまず目を見張った。トマトやキュウリ、ナスをはじめとして、聞いただけでも二十種類近くの野菜が栽培されている。それで、少し乗り気でなかったのも忘れて私は楽しんでいった。

ただ収穫の作業を楽しんでいただけではない。もちろん知ったこともたくさんある。最初に収穫したのは、鮮やかな赤を持ったトマト。一口にトマトといっても、おじさんが教えてくださったようにその種類は様々だ。丸い形をしたミニトマト、それより少し大きいもの、細長いもの、そして小指の先くらいの大きさしかないマイクロトマト。かごいっぱいに入ったトマトを見ると、なんだか嬉しい気持ちになった。おじさんが「もぎたてが一番おいしい」と言っていて、私も食べさせてもらったのだが、本当に甘くて、新鮮な野菜のおいしさを実感した。続いて、私は園芸用のはさみを使ってキュウリの収穫を行った。ところが、目の前になっていたのは私が想像していたのと全く違うキュウリだった。スーパーでよく見るキュウリの二倍くらいはあったのではないだろうか。また、大きいうえにまるでゴーヤのようにトゲがびっしりとはえたものもあった。持ったときにずっしりと重くて、ここまで育てた自然の力はすごいと改めて思った。その後、またかごいっぱいになるまで私が摘んでいたのはブラックベリーだ。熟しすぎていたり、まだ早かったりするものを見極

めるのは大変な作業だが、その時はもう夢中で手を動かしていた。まだ暑さの残る午後、東京で見られないような虫に驚きながらも、今はこの自然を全身で感じよう、そう思って作業をしていた。

こうして私は収穫作業を体験したが、これは農業全体のほんの一部にすぎない。おじさんとおばさんの話を聞いて分かったのは、今回体験できなかった部分の、農業の大変さだった。まず植物によって種から植えるか、苗にしてから植えるかを分けるところから始まる。それを少しずつ時期をずらして植えるように計画する。ただし、前年と同じ場所に同じ作物を植えてはいけない。これは土の栄養分を考慮することだ。そのうえ、新潟は雪国だ。雪が多いか少ないかによっても植える時期を調節しなければならない。他に、タヌキなどのムジナに作物がやられてしまわないように対策も必要だ。しかしそこまでしても、その年の気候によっては不作になる作物もある。計画通りに全てできる訳ではない。体験先のおじさんたちも、農業を始めてまだ四、五年だそうで、上手いかなかった経験もあるそうだ。けれど次の年にはそれを生かして、植える時期を変えてみるなど、試行錯誤を繰り返しているという。そうして新しい知識を身につけ、さらに工夫を重ねていく。それができるのが農業の良いところだと私は思った。農業は楽しいだけではない。苦労も多い。だからこそ、自然から学ばされることもたくさんあるのではないだろうか。

今回農業を体験して私が知ったのは、農業を通して得られるたくさんのものである。例えば、収穫の喜び。これは私も味わ

うことができた。それに、作物を育てる過程での失敗、それを次に生かす経験、そんな苦勞を乗り越えて収穫に至ったという達成感。これらは実際に育ててみないと分からないけれど、きつとあるはずだ。もちろん、農業でなくても似たようなことを得られる場面はいくらでもある。しかし、農業でしか学べないことがある。農業は、自然との闘いだ。自然は人の手には負えない。だから失敗をして、学ばされる。そして何より、自然の雄大さに気付く。作物は自然の恵みであり、私たちだって毎日その恩恵を受けている。それを誰よりも、肌で感じるができるのは、農家の人だと私は思う。後継者不足とか、問題を抱えている農業だが、たくさんの人にとってのことを気付いてほしい。農業のすばらしさを知ったこと、それが今回の体験での一番の収穫だ。

大きな手荷物を抱えた帰りのバスの中、何だかこのまま帰るのが惜しい気持ちだった。きつと、大切なことを教えてくれたこの体験を、私は忘れることはできないだろう。



大自然の中で

東京都立白鷗高等学校附属中学校 二年

峰 壮 鴻

七月三十日、僕たちは農村宿泊体験学習の一環として、新潟の農家の方のご自宅に泊めてもらい、農業体験をさせて頂くことになりました。

農家の方の家に着いた当初、僕は「何をやるのだろう。自分にくまなく仕事をこなすことができるかな。」といった不安と緊張で頭がいっぱいでした。そんな気持ちで農家の方の畑に行った僕は、目の前の畑の光景に目を奪われ、不安と緊張を一気に拭うことが出来ました。

都会で暮らす僕たちにとって、間近で見た畑は、バスの中から見ていた光景とは全く別のものになっていました。僕たちが見た畑は決して大きいものではありませんでしたが、その中には数えきれないぐらいの農作物が実っていたのです。

最初の僕たちの仕事は、畑に実っている「ササギ」という豆をとることでした。僕たちが豆を取り始めると、農家の方が

「ササギは全部取らないでなるべく小さいものからとるようにしてね。大きいものを取っちゃうと、調理する時にかたくて切れないから。」
とやさしく教えてくださいました。

それを聞いて、ぼくは「農家の人たちは種を植えて作物を作るだけでなく、そのあとの事まで視野に入れて作業をしているんだ。」と驚かされました。

次の僕たちの仕事は、畑に植えられているジャガイモを掘り起こすという作業でした。ジャガイモの出ている葉の部分を見る限りでは、埋まっているジャガイモは少ないと思っていたのですが、実際に掘り起こしてみると信じられないぐらいの数のジャガイモが埋まっていたのです。

「たくさん埋まっているな。」

と友達も驚きの表情をあらわにしていました。それから農家の方が実際に手本を僕たちに見せながら、

「こうやって腰を入れながらスコップで掘ることが大切だよ。」

とコツまで教えてくれました。掘れば掘るほど出てくるジャガイモに僕たちは夢中になってしまい、袋がいっぱいになっても掘り続け、農家の方にも

「もう十分だよ。」

と止められる程でした。

最後の仕事は二日目に行い、内容は草刈りでした。「この仕事は簡単そうだな。」と思っていた僕はその大変さに舌を巻きました。まず第一に、取っても取っても細かいところが残ってしまうことです。そのうえ刈っても途中で草がちぎれてしまうこともあったのですべて取りきることは出来ません。第二に低姿勢だったのですぐに体中が痛みだしたことです。そんなことを繰り返しながら草刈りをしていた僕は「農家の人は大変だな。」と毎日作業をしている農家の方を

いっそう尊敬するようになりました。それに、草刈りを終えた後、取った草の量に僕たちはすがすがしい達成感を覚えることが出来ました。

また、一日目の夜には僕たちが収穫したササギの和え物ができ、その味は今でも僕の舌の上に残っています。それに、一つの仕事を終えた後のご飯がこんなにもおいしいとは思っていなかったので驚きでした。

農村体験の最終日には、農家の方が冗談で

「君たちも大人になったら新潟に住んでみたらいかがい。」と言われた時はとてもうれしく、「それも悪くないな。」と本気で思う程でした。

一泊二日の農村宿泊体験学習は僕にとって驚きの連続でした。しかし、その中で僕は多くのことを学んだと思います。一つは新鮮な野菜の味や姿です。都会で見る野菜はいつも袋詰めされたものばかりですが、農村体験では新鮮な野菜の姿や味を確かめることが出来ました。二つめは、自然の美しさとすごさです。少しでも栽培できる場所があれば、そこにたくさん野菜を作ることが出来る自然の力にはとても驚かされました。三つめは、農業の大変さです。今まで僕は何の気なしに野菜や米を食べていました。しかし、僕たちの口に入るまでにはたくさんの農家の人たちの努力があることを知ったのです。

僕は今まで農業の大変さを分かっているつもりでしたが、今回の体験で本当の意味での農業の大変さを知ることが出来たのではないかと僕は思います。

この日を境に僕は母と一緒に買い物や料理を手伝うように

なりました。野菜の大切さを間近で感じる事ができる大事な機会だと考えています。これから、野菜などの作物に限らず、全ての食べ物に感謝を込めながら食べていきたいと思っています。僕の「食」に対する意識はまだまだ薄いかもしれませんが。しかし、これからの生活次第で意識を高めることは出来ると思います。また、僕に「食」について改めて考えさせてくれた農業が発展していくことを願っています。

職場体験を経て

東京都立大泉高等学校附属中学校 二年

荒川 七音

私は職場体験で図書館に行き、そこで人のことを考えて行動することの大切さを学びました。これは図書館での業務だけのことではなく、どんな職業にも当てはまることだと思います。

図書館には、利用者のことを考えてのことだと分かる仕事がいくつもありました。その中で私が特に驚いたのは、返却された本の汚れなどをチェックしていたことです。毎日大量に返却される本を一冊一冊人の目で確認するのはとても手間がかかります。でも、それだけの手間をかけてまでやるということは、次の利用者に気持ちよく本を読んでもらいたいと

いう思いが強いからだと思っています。他にも、頼まれた本を階段を駆け降りて取りに行くなど利用者のことを一番に考えているということがよく分かりました。私と一緒に本を取りに行った職員の方は「疲れるけど早く本を届けてあげたいから」と言ってお本を探していました。この言葉を聞いて、私ももっと役に立ちたいと思うようになりました。

職場体験の中で、人のことを思って行動していてうれしいこともいくつかありました。

頼まれた本を見つけて渡したとき「ありがとう」と言ってもらえたことは一番印象に残っています。何気ない一言でしたが、急いで書架に行って一生懸命探したので、私にとってはとてもうれしい言葉でした。そして同時に「人の役に立てた」ということを実感する機会にもなりました。

自分がしたことが感謝されて、言葉として返ってきたとき、そのうれしさと達成感はとても大きなものでした。そして、それがやりがいにもなって、楽しく仕事を体験できるうになりました。

職場体験が始まって何日かすると、利用者の方だけでなく、職員の方にも感謝してもらえようになりました。本を棚に戻す作業や予約された本を探す作業は毎日のようにやっていたので、素早く出来るようになり「助かるよ。」と言ってもらえました。私は、少しでも役に立ちたいと思いながら



仕事に取り組んでいたので、やはりこの言葉もうれしかったです。

利用者の方々はもちろん、職員同士の気遣いもあるとても良い雰囲気職場でした。カウンターの交代時間の十分前には来て交代していたり、自分のすることがなくなったら他の人を手伝いに行ったりするなど、当り前のことかもしれないけれど実際にきちんと出来ている人たちを見ると憧れずにはいられませんでした。この図書館で職場体験をして、当り前のことでも人のことを考えて行動するのは大切なことだと改めて感じました。人のことを思うと自分と相手がうれしくなるだけではなく、作業そのものの効率も上がっているように見えました。この図書館は、互いに気遣いができる人たちがいるからこそ成り立っているのだと私は思います。もし、それができない人たちだったら、この忙しい図書館はあつと言う間に機能しなくなっていると思います。だから私は、相手のことを考えて協力できるような人になりたいです。

職場体験をするまで私は将来のことをよく考えたことがありませんでした。ただ漠然と「安定した職業がいい」「得意なことが活かせたらいい」などとしか考えていませんでした。それが、職場体験に行ってから「こんな仕事をしてみたい」「こういう人になりたい」と少しずつ具体的に考えられるようになりました。図書館業務はカウンター作業と本を棚に戻すことくらいしかないだろうと思っていましたが、そんなに甘い訳はなく、ほぼずっと動き通しました。知らなかった作業も多く、冷房が効いていても汗ばむくらい大変でしたが、それだけにやり遂げたときの達成感もありました。仕事

をやり遂げるとこんな気持ちになれるのだと分かってからは、自分に向いていてやりがいのある職業とは何だろう、というように考えるようになりました。これからは職場体験で学んだことを参考に将来のことをじっくり考えたいと思います。そして、周りのことをよく見て行動できる社会人になりたいです。

職場体験で学んだこと

東京都立大泉高等学校附属中学校 二年

常 泉 乃 愛

私は今回、ハローワーク池袋で職場体験をさせていただきました。ハローワークでは主に、仕事を探しに来ている人たちの相談を受けたり、就職活動をサポートしたりしています。私はそこでたくさんのことを学び、将来について考えるようになりました。

私は最初、職場体験先が決まったとき、ハローワークとは何かが全く分かりませんでした。だから、職場体験当日までは期待と共に不安でいっぱいでした。

そして迎えた職場体験初日。ハローワークの中に入ると、職場の方々が温かく迎えてくれました。事業所第一部門という部署では、コピーとりや印刷という作業だけではなく、

様々な会社のデータ入力や求人申し込み書の記入、ポップ作りなどの仕事をさせてもらいました。さらに、二日目以降はほかの部署や、サンシャイン庁舎でも体験させてもらいました。どの部署の方々も忙しいのに、私たちに丁寧に仕事のやり方を教えてくれました。

働くことは、学校で勉強することよりもとても大変でした。失敗したら人に迷惑をかけるので落ち込むし、学校のようにはおしゃべりすることができません。社会人はすばらしいと思います。私の母もその一人です。母は、毎日仕事なのに家事洗濯もします。そんなハードなスケジュールをこなす母を、私は尊敬しています。また、今回ハローワークへの通勤で、混雑した電車に乗ったり、人混みの中を歩いたり、働く人の大変さが少し経験できました。

では、人はなぜ「働く」のでしょうか。一人一人が働くことによって、この社会は成り立っています。だから、生活するためでもあるけれど、社会の一員だからだと思います。また、どの仕事でも、社会や人の役に立っているので、喜びや大きな達成感を得られるからだと思います。

私が今回の職場体験で学んだことはたくさんありますが、その中の三つを挙げます。

一つめは、世の中の厳しさです。私がサンシャイン庁舎で受付の仕事をやっていたとき、年齢に関係なくたくさんの人たちが求職のために来ていました。あっという間に求人検索機が埋まっていきました。大学を卒業しても仕事が見つからなかったり、現在の仕事が自分に合わなくて転職しようとしている方々がたくさんいることも知りました。私はそういう

環境の中で職場体験をしていて、将来のことがとても不安になってきました。そんなとき、ハローワークの方が、「将来就きたい仕事を決めるのは、大学に入ってからでは遅いから、高校生のうちから考えておきなさい。」とアドバイスしてくれました。私が将来就きたい仕事はまだ明確には決まっていませんが、大学を卒業して資格は必ずとりたいと思っています。どの仕事でも大変なことはたくさんあると思います。だから、私は本当にやりたい仕事を見つけ、今はそれに向かって努力しようと思います。

二つめは、ハローワークで働いている方々への感謝の気持ちです。職場の方々は、とても忙しい中、私たちの面倒を見てくれました。担当の方以外でも、できる事が少ない私たちに仕事を見つけてくれました。また、直接関わってはいないけれど、声をかけてくれる方もいて、心強くうれしかったです。

三つめは、社会人として大切なことです。それは、「時間を守ること」「あいさつや返事をしっかりすること」「感謝の気持ちを忘れないこと」です。私はこの五日間、これらを達成できるように心掛けて仕事をしていました。

今回の職場体験で、ハローワークでだからこそ学べたことがたくさんありました。それらを教えてくれた職場の方々には本当に感謝しています。私はこの五



日間で、社会人の大変さが分かりました。そして、将来のことについての考え方が変わりました。五日間という短い期間でしたが、本当にたくさんのことを得ることができました。今回職場体験で学んだことを活かし、毎日の勉強にしっかりと取り組んだり、挨拶など基本的な生活習慣を身につけたり、人とのコミュニケーション力を身につけたりできるよう努力し、将来に向けて頑張ります。

仕事

東京都立大泉高等学校附属中学校 二年

岡 本 晋

先日の職場体験を終え、まず僕は仕事の大変さを強く実感しました。五日間の体験でしたが、普段の一週間よりも長く感じるほど忙しかったです。

職場体験では、地元のスーパーでお世話になり、お店の方の指導の下、仕事について学ばせていただきました。その中で最も印象に残ったことは、お客様に対するサービス精神です。今回の体験で、僕は五日間に渡って、品出しを担当しました。この仕事は、ただ商品を店頭に補充するだけではなく、どれを補充すべきか自分で判断して、お客様に商品を提供しやすいように配列しなければなりませんでした。しか

し、このような大変な作業をしても、お客様へのあいさつを忘れず、質問には適切な対応をしなければならなかったで、とても疲れました。また、二日目以降は特に指示があったわけではなかったのですが、今自分は何をすべきなのかを、自分で考えて行動しなくてはなりませんでした。このような適切な判断や、お客様第一の考えが、僕が将来働く上でとても大切であると実感しました。

そして何よりも、この体験を通して僕自身の考えが変わったことが、大きな収穫であったと思います。それは、父に対する尊敬の意です。僕の家は、特別に裕福な家庭ではありませんが、家族四人で充実した日々を過ごしています。そんな家庭を影で支えてくれていたのが、父です。どこにでもいる普通の会社員です。一週間仕事で家に帰ってこれない時もあります。休日にはどこかに連れて行ってくれたり、料理をつくってくれたりします。大変な仕事を毎日のようにしているにもかかわらず、自分の時間を削ってまで家族のために尽くしてくれる父を、僕はとても尊敬しています。そんな父のようにするためには、少しずつ成長していかなければなりません。父の仕事量に比べたら、たった五日間の職場体験なんて、ちっぽけなものです。しかし、その五日間を通して父のありがたみを再確認できたことは、父のようになる、という自分の将来像に近づく第一歩であると思います。

これから先、どのような人と出会い、どのような人生を送るのか、僕には分かりませんが、ですが働くということは誰もが通らなくてはならない道だと思います。それは、決して楽なことではありませんが、僕は父のように、大切な誰かのた

めに、一生懸命に働ける人になりたいです。人はなぜ働くのか、働いた事のない僕には分かりませんでした。今回の職場体験を通して、僕が本当に学んだことは、働くことの意味なのかもしれません。人は、自分の幸せのためだけではなく、他の誰かの幸せのために働く。だからこそ、どんなにつらい仕事でも、頑張って働くことができるのだと僕は思います。今回僕は、スーパードの接客からサービス精神を学び、大変な仕事から父のありがたみを学び、そして、働くことの意味を学ぶことができました。これは、職場体験が有意義なものであった証です。たったの五日間でしたが、僕にとっては人生の大きな勉強になりました。職場体験でお世話になった方々には、本当に感謝しています。

僕は将来、たくさんの人に希望を与え、笑顔にする仕事に就きたいと思っています。この夢がいつか目標に変わり、その目標を達成するには、今まで経験したことがないような困難が、僕を待っていると思います。ですが、どんな困難も乗り越えられる人になるために、今という瞬間を大切に、そして、今回学んだことを忘れずに、自分の道を歩んでいこうと僕は思います。



職場体験で学んだこと

東京都立大泉高等学校附属中学校 二年

篠原すみれ

私は、七月八日から十二日まで、「東京都教育庁義務教育特別支援教育指導課」という所に職場体験に行きました。

そこで働く方たちは、ほとんどが公務員という立場です。私は、「公務員」というと競争があまりなく安定した立場で、一般のサラリーマンのようにには仕事が大変ではないイメージがありました。

実際、不況の世の中になると、その安定さに魅力を感じ、公務員を志望する人が増えるといったニュースをテレビ等で見るがあります。だから公務員になるための試験に合格することは大変でも、一度公務員になってしまえば、その後はそれほど大変な思いをすることなく働いていられるのではないかと思っていました。

しかし、今回教育庁で職場体験してみると、私の中の「公務員」のイメージが大きく変わりました。

まず驚いたことは、仕事の内容によっては立ち仕事や外回りがあったり、細かい手作業が多かったりしたことでした。

私は初め、「教育庁の方たちはデスクワークが多く、ずっとパソコンに向かって静かに仕事をしているのかな」と思っていました。しかし、実際には電車に乗って遠いところにあ

る学校まで訪問したり、倉庫での資料の整理やポスター等の作成など立ち仕事、手作業がとて多くありました。

またその他にも、残業をしておそくまで仕事をしたり、職場に泊まってまで仕事をしたりすることもあるそうです。

私は、このようなことを全く知りませんでした。だから、「公務員になれば楽なのだろう」と思っていたことが恥ずかしくなりました。

職場体験に行って一番印象に残ったのは、ポスター作りでした。

私は、ポスターを作成するときに注意するべき点は、きれいに描いたり、ていねいで分かりやすく描いたりすることだと思っていました。しかし、担当の方は「ポスターは不特定多数の人の目につくものなので、分かりやすく見やすいというだけでなく、見る人が不快になったり、いやな気持ちになったりしないように気をつけなければいけない。描くものの色や形・表現など、細かい所まで気を付けて、見る人の気持ちを考えることがとても大事なことだ」とおっしゃっていました。私はその言葉を聞いて、「ポスター一つにも、とても気をつかって作らなくてはならないのだな」と心に残りました。

私は今まで仕事について深く考えたことはあまりありませんでした。仕事は、お金をもらうためにするものだと思っていたのです。

しかし、今回職場体験をするうちに、だんだん考えが変わっていききました。仕事とは、自分がお金をもらうためだけにするものではなく、人の役に立ったり喜んでもらったりす

るためのものだと実感しました。

直接会ってお礼を言われることはないかもしれないけれど、どんな仕事でも誰かのために役立っているので、どんなときも相手のことを考えて仕事をするのが大切だということを学びました。

私は、まだ将来つきたい仕事は決まっていません。しかし、どんな仕事についたとしても、今回学んだことを忘れずにいたいと思います。

また、仕事に対しても自分のイメージや先入観で決めつけることなく、広い視野をもちいろいろな仕事について深く知りたくなりました。

そして、将来仕事についたときは、どんな小さなことでも手を抜かず、真面目に向き合い、仕事を通じて社会に貢献できるような人間になりたいと思います。

職場体験から学びえたこと

東京都立大泉高等学校附属中学校 二年

立 石 桐 子

私は、七月の終わりにベネッセチャイルドケアセンターという保育園で職場体験をしました。最初は「一番楽しそうだな」という理由で保育園を選んだのですが、実際行ってみる

と、それだけではないということを学ぶことができました。

私が行ったのは、0歳児のひよこクラスです。同じ0歳児といっても、成長段階の差が大きく、まだハイハイもできない子から、歩ける子までいました。そのため、世話をするうえで注意しなければいけないことが一人一人違って、大変でした。しかも、子どもたちはみんなまだ話すことができないので、何をしてほしいのか分からず、理解するのが難しかったです。しかし、子どもたちはすぐになついてくれました。抱っこをせがまれたときや、私が離れると追いかけてきたときは本当にかわいかったです。鼻水を私の服になすりつけられようが、手をなめられてよだれでべとべとにされようが、それすらかわいく思えました。

保育士の仕事は、規則正しく毎日同じことの繰り返しですが、とても効率的に行われていました。朝子どもを預かると、まず部屋で遊んで、その際順番にお茶を飲ませます。そのあと、園庭で外遊びをします。帰ってきたらまた順番にお茶を飲ませて、一人ずつ体を洗ったりおむつを替えたりします。そして終わった子から、また順番に昼食を食べさせていき、食べ終わった子から寝かせます。昼寝の間に保育士は昼食をとって、日誌を書きます。子どもが起きてきたらまた遊びます。その中で私は子どもたちと遊ぶこととお茶を飲ませることを体験しました。

最終日、一週間のまとめとして様々な工夫を教えていただきました。まず一つは、壁に掛けてある、おもちゃの置き場所を示す写真です。この写真を見ながら保育士がきちんとおもちゃを片付けることで、その姿を見ながら子ども

たちは自分たちで片付けるようになるそうです。一つめは、天井から下げている飾りや、天井にたわませて取り付けた布です。これらによって天井が低くなり、背の低い子供たちが安心できる空間になるそうです。三つめは、遊ぶ場所と食べる場所を別にするということです。仕切ることにより、子どもたちが遊びと食事を区別できるようになります。また、食事や昼寝の時刻を決めて習慣にすることで生活リズムを作っているそうです。

実際に私が仕事中に気づいたこともあります。暑い日は小さい子にとって日差しの照り返しが強いので、遊ぶ時間を短くしたり、外遊びの時間を室内遊びに変えたり、こまめにお茶を飲ませたりして熱中症にならないように細心の注意を払っていたことです。また、私が工夫したこともあります。子どもたちと目線を合わせるために座って世話をするのですが、私のくずした足に引っかけた転んだ子がいたので、常に正座でいるように気を付けたことです。

職場体験のあと、いとこの家に行く機会がありました。いとこはひよこクラスの子と同年だったので、職場体験のときに学んだことを思い返しながら遊びました。するとそこには、ベネッセチャイルドケアセンターにあった、中から布などを出し入れする筒状の手作りおもちゃがあったのです。現役の保育士でもある叔母に聞いてみると、

「そのおもちゃ、子どもって好きだよ。それがあるってことは桐子ちゃんが行った保育園は良いところだよ。置いてあるおもちゃでどんな保育園かわかるの。」

と返ってきました。置いてあるおもちゃにも工夫があるのだ

なと思いました。

このようなたくさんの工夫を知って、保育士という職業は、こんなにも子どもたちのことを考えている、奥の深い職業なのだと感動しました。きっとそれは保育士だけではなく、どの仕事にも共通することだと思っています。それぞれの仕事に、私の知らないところがあり、その仕事をしている人も、そんなところにやりがいや誇りを感じているのかもしれない。

「一番楽しそうだな」と気楽な感じで体験した保育士でしたが、楽しいのはもちろん、とてもやりがいのある仕事でした。今まで仕事について深く考えたことはなかったのですが、職場体験を通して、将来自分がやりがいを感ぜられる仕事をしたいと強く思うようになりました。

職業体験を通して

東京都立大泉高等学校附属中学校 二年

佐 仲 杏 美

私は職業体験でシャトレーズに行かせてもらいました。シャトレーズは和・洋菓子やパン、菓子折りなどを扱っているお店です。体験場所の中に食品を扱う事業所は少なく、希望が多く、決まった時はとても嬉しかったです。

私はもともと料理をする事が好きで、お菓子作りもよくし

ていました。体験所にお菓子屋さんがあると聞いたときにはぜひ行きたいと思いました。また、たくさんの人と関わることのできる接客業には以前から興味があったので、体験前からとても楽しみでした。その中身は初めて働くということはもちろん、いつもは客として行くお店の裏側を知ることができ、自分自身が品物を提供する体験ができるということに對してです。そして、たくさんの社会勉強や知識を得たいと思います。

五日間体験をさせてもらった裏方での仕事内容はお菓子をに入れる箱折りや箱詰め、賞味期限のシール貼りです。菓子折りを作る作業は工場のロボットで行っていると思っていたので、人の手で作り上げられていると知り驚きました。厚紙を折り目に合わせて本体とふたを作り、商品とシャトレーズのカードを入れるのが一通りの作業です。商品は様々な種類があり、大きさによっても入れ方や並べ方が違ってくるので、覚えるのにも一苦労でした。賞味期限のシール貼りはひたすらシールを貼る地道な作業です。しかし、この作業で賞味期限が書いてあるのが当たり前だと思っていた考え方からこのような小さなことでも人の手がかかっているという基本的なことを改めて認識することができました。そしてお店では商品の陳列です。私はなく

なった商品の補充をするだけだと思っていましたが、見栄えを良くするために置き方やパッケージの張りを直したりするの



も大切な仕事です。ここでも、商品を売るためにはお客さまを第一に考えるという基本的な考え方を再認識しました。そして、私が一番印象に残った仕事は実際に商品に触れるチョコペン書きや試食品作りです。食品ということで衛生面をより重視した仕事になりました。チョコペンで自分の名前を書いたところ上手だということとで実際にお客様のプレートを担当しました。力が認められて嬉しかった半面、年に一度楽しみにしているプレートかもしれないと思うとプレッシャーもありましたが、きれいに書くことができました。人に喜んでもらう仕事のできるうれしさと苦勞を実感できました。試食品作りは包丁を使用しました。ガラス張りの部屋でお客様が見える場所での作業でした。慣れていない環境の中とても緊張しましたが、私が切り分けた試食品を食べているお客様の姿を見ることができました。切っただけなのにやりがいを感じることもできました。切っただけなのにやりがいも一段と大きくなっていくのではないかと思いました。

私は職業体験を通して普段は得ることのできない様々なことを学びました。手作業の多い地道な作業の大変さや、接客業というお客様を一番に考える考え方です。そして従業員のみなさんが楽しそうに働いており、実際に私も楽しかったことです。私達に仕事を教えて下さったマネージャーさんが「とにかく楽しんで」とおっしゃっていたようにたくさん楽しむことができました。仕事を楽しめれば自分もお客様も笑顔になれることが分かりました。私は仕事に対して自分はもちろん、他人の役にも立てるすばらしいものだと思いました。そして職業の目的は、自分自身の生活のためだけでなく

人とのつながりを通して社会貢献だと思いました。このように職業は生活するためにはもちろん社会を動かしていくためにも重要なものだと思います。この事を忘れないで将来私も職業に就き、自分の生活のためだけでなく、自分を高めながら社会貢献のできる人になっていきたいと思っています。



表彰式会場・受賞者席

高等学校の部 最優秀賞

命を学ぶ責任

東京都立瑞穂農芸高等学校 三年

畠 明 宏

私の将来の目標は畜産分野に貢献すること。具体的には食鳥処理衛生管理者になることです。私がこの仕事を目標に持つようになったのは、高校での実習がきっかけです。

私に通っている畜産科学科では、実際に動物を飼育することが授業の一環です。飼育するということは「命に対する責任」を伴うということです。入学したばかりの頃はそんなに大げさなこととは思わず、日々の管理に追われていました。でも一年も半ばを過ぎた頃、私は「命への責任」を痛いほど実感させられました。それは「と畜」の授業でした。

これはヒヨコを若鳥になるまで飼育し、最後は食肉にするという授業です。ヒヨコの頃はとても可愛くて、これをお肉にすることなど想像もつきませんでした。しかし、食用の鶏はビックリするほど早く育つように品種改良されているので、どんどん大きく成長します。日々育っていく鶏を見て「あ、そういうえば、この鶏、と畜するのだ」と現実味を帯びてくるようになりました。

と畜の実習の日、先ずは先生がお手本を見せてくれました。凄くあっという間で、数秒足らずで終わってしまいました。

でも首を切られた後も、鶏はもがいていました。自分の番になり鶏の脚を持つと、まるで何かをされるのが、わかったかのように、必死でもがいていました。と畜用の包丁は見慣れた包丁とは違い、先端が怖いほど、とがっていて、鉛色で冷たい刃物でした。この包丁を握ったとき、私はこれから鶏を殺すのだと思い、すごく怖くて、体が震えてきました。でも中途半端に切ると、切れが悪く、よけいに苦しみます。私は、覚悟を決めて頭部の下の頸動脈のところを首の骨に刃があたるまで、グサッと切ると、鶏は目を閉じて「クー」と言う鳴き声を出しました。すぐ頭を下にして放血器に掛けると、黒い血液が流れ出て、辺りは血の匂いが充満していました。この何とも言えない切った感じが、その日ずっと手の中に残っていたのを今でも覚えています。

そして、この肉を家に持ち帰り調理をしました。調理をしている肉は、いつもの見慣れた肉と同じでしたが、この肉を食



高等学校の部 最優秀賞 畠 明宏さんの朗読

べた瞬間、「命」をいただいているのだな、という気持ちが心の底から湧きあがってきました。私はこれまでも、動物からたくさんの「ありがたさ」を教えてもらってきました。しかし、たくさん教えてもらった中でも「命」という分野に関してはあまり知る機会がありませんでした。



私は「動物が死ぬこと」には大きく二通りあると考えます。一つめは、ペットとして育ててきた動物が、動物本来の寿命を終えることです。これは、幼い頃から自宅で動物を飼育してきたので、たまに経験することがあり、自然と分かってはいました。二つめは、食べ物となるための動物が、と畜されることです。この「死」は今までは知ること、考えたこともありませんでした。しかしそれを学校で学ぶことができた。とても大変なことが多いですが、将来の職業を決めるというこの時期に多くの貴重な経験をすることかでき、本当にこの学校に入学して良かったと心から感じています。おそらく農業高校に通っていなければ、「命を学ぶ責任」について考えることはなかったと思います。

と蓄を体験したことで、すべての食べ物に対しての考えが変わりました。このことは鶏だけではなく、全ての家畜や野菜にも言えることだと思います。特に野菜は規定のものにならなかった場合は捨てられることが多いです。その規定に達した野菜だけが市場に回り消費者に届きます。これはまるで生存競争、「命のオーディション」といっても過言ではな

いかもありません。この壮絶なオーディションを勝ち残った野菜を、ただ「嫌い」というだけで食べ残すのは、その野菜を生産する過程で捨てられてしまった野菜と、野菜を生産した過程に携わる全ての人に失礼だと思います。

と蓄の授業を経験してから、私はそうのように考えるようになり、さらには、大学で畜産を学び、食鳥処理衛生管理者の資格を取得して、畜産分野に貢献したいという将来の明確な目標を持つようになりました。

食鳥処理衛生管理者とは、獣医師や大学の畜産学科を卒業した者、または食鳥処理経験三年以上に従事した者などが受験資格を持つ国家資格です。鶏の飼育の現場から解体過程における衛生管理の責任者として、各処理場の規模に応じて人員を配置することになっています。私は「と畜」の経験で、家畜を肉にすることは「責任」を伴うことなのだと思います。この責任とは、飼育するだけではなく、と蓄してから、食卓に届くまで必要だと考えます。ですから、私は、大学に進学し家畜の飼育技術を学んだ上で、食鳥処理衛生管理者の資格を取得し、と畜する工程をしっかり管理し、売れ残りが無く、安全で、美味しく食べられるように、最後の役割までを果たしたいのです。食べ物、食べ物になるまでが使命ではなく、食べた相手の血と肉になり、今でも私たちの体の中で活動しています。つまり「命」と「命」をつないでいるということなのです。

私の学んだことは限られた人が経験できることです。私たちの暮らす東京では家畜の飼育現場を見る機会はほとんどありません。しかし東京で暮らす私たちだからこそ考えるこ

と、知っておくべきことがあると思います。そのお肉や野菜がどうやって私たちの食卓に届いたのかということをです。「残さずに食べることに」この責任から実践していきたいと思っています。そして、心からの感謝をこめて「いただきます」と言える人になりたいです。

高等学校の部 優秀賞

夢の通過点

愛国高等学校 三年

鈴木香南子

私の「夢」は、看護師になること。この「夢」を叶えるために、今通っている学校で、看護の勉強をしている。

私の高校生活は、常に「夢」と一緒に過ごしてきた。それは、楽しいことでもあり、苦しいことでもある。私は、今までの高校生活で、たくさんを感じ、たくさんのかたとを学んだ。その学びは「夢」を叶えるためだけでなく、一人の「人間」としても、とても大切なことだった。

学校での授業では、衛生看護科ということもあって、一般教科よりも看護の専門教科の方が授業数も多く、学ぶことも多い。入学当初は、看護の専門教科を学ぶことに対して、楽しみでいっぱいだったが、授業を受けていくうちに、自分

の中で「違和感」が芽生え始めてきた。

専門教科を学ぶにあたって、必ず分厚くて重い教科書が付いてくる。教科書を開くと、聞いたことのない専門用語や、見たことのない漢字がたくさんあり、読んでいくだけでも大変なものであった。また、授業が進んでいくうちにだんだん難しくなっていく、覚えていく専門知識も多くなり、授業に付いていくだけで精一杯であった。「こんなに難しいとは思ってなかった。」自分の中で芽生えた「違和感」とは、夢と現実との「ギャップ」であった。

この時初めて、「夢」は「気持ち」だけでは叶えることが出来ない、と痛感した。当時の私にとっては、とてもショッキングな出来事であった。目の前にある現実を直視できず、初めて挫折に近い感情を抱いた。それでも諦めずに続けることが出来たのは、看護師になる、という夢の「原点」を見失わなかったからである。

二年生の秋に、私達看護科にとって大きな行事があった。それは、戴帽式である。戴帽式とは、名前の通り「帽子を戴く式。」すなわち「ナースキャップを戴く式。」である。この式でナースキャップを戴いて、来年から始まる病院実習に臨んでいくのである。この式で私は、「誓いの詞」を述べさせていたたく、という大役を務めさせて頂いた。

戴帽式を迎えるにあたって、私は「初心を忘れずに式に臨もう」と決めていた。「初心を忘れずに」というこの思いを、同じ「夢」を持ち、共に成長し合う仲間に向けて伝えたい。そのため、「誓いの詞」には私が看護師になる、と決めた「原点」を述べることにした。

私が看護師になる、と決めた「原点」は、小学五年生の時に経験した母の死である。当時の私にとって、とても直視出来ない現実であった。そんな悲しんでいる私を救ってくれたのは、母がお世話になった看護師の方だった。何も言わず、ただただ手を握ってくれていた。それだけのことでも私の心は不思議と落ち着いていた。この時私は、母から「夢」という大きな贈り物を貰った。

私にとって戴帽式は、夢の「原点」と向き合うことが出来た機会でもあり、改めて看護師になる、と決意した機会でもあった。

そして、二年生の三学期から病院実習が始まった。病院、という厳しい社会の中で看護を学んでいくのである。実習の形式として、学生一人に患者様一人を受け持たせていただき、患者様を通してコミュニケーションや援助方法を学んでいくのである。また、病院の構造や特徴、看護師の役割なども学んでいく。

今までの実習の中でも、たくさんの壁にぶつかってきた。あの時と同じ「違和感」を何度も感じ、指導者の方からの厳しい御指導を受けとめるのも難しく、家に帰ってきてからも記録や課題で睡眠時間が削られ、体も心もボロボロだった。「辛い」「逃げたい」そう思う日が何度も続いた。

そんな中、受け持たせていただいた患者様が退院となった。嬉しい半面、お別れと思うと寂しい気持ちもあった。今日でお話するのも最後か…と思いつながら、笑顔で患者様のもとへ訪室した。患者様も笑顔で迎えて下さった。そして、私にこう話してくれた。

「私が一番辛かったときに、鈴木さんが傍にいてくれた。ありがとう。鈴木さんは必ず、いい看護師さんになれますよ。」私は、涙をこらえるのに必死だった。このときの患者様の言葉、笑顔は今でも忘れない。

一人でも多くの患者様を救いたい、笑顔にしたい。私はそんな看護師になりたいと思っている。それなのに、患者様にはたくさん救われて、笑顔にさせてくれた。患者様は、私達看護学生に自分の体を犠牲にしてたくさんのことを教えて下さっている。患者様はまさに「生きている教科書」なのである。私は辛いことがあると、しっかりと向き合わないで逃げていた。でも、患者様は違います。自分の病気と葛藤がありながらも向き合っていて、逃げてなんかいなかった。そんな患者様をみて私は、もっと強くなりたいいけない、と感じた。人の痛みを分かろう、と思っているうちは、ただの自己満足に過ぎないな、とも感じた。

病院実習はまだ二カ月は残ってる。今までよりもっと求められ、御指導も厳しくなると思う。しかし、ここで挫けている場合ではない。「夢」へのスタートは、まだ切ったばかりである。そう、私の高校生活は、夢の「通過点」に過ぎないのだ。



ボランティア活動を通して

東京都立農産高等学校 一年

加藤 幸乃

私は人の役に立ちたい、人に喜ばれる事をしたいという思いから、中学校三年間ボランティア部に所属していました。色々な活動をしてきましたが、なかでも私が一番好きだった活動は、中学校の近くにある知的障害者施設を定期的に訪問する事でした。利用者さんはダウン症の方や自閉症の方が多く、皆個性豊かでした。利用者さんと一緒に、使用済みおしぼりの洗濯、お菓子の箱作りなどの作業をしました。作業をしながら利用者さんとコミュニケーションをとる事は、とても難しいことでした。会話をするのが難しい利用者さんと接する事もあり、初めはどうしていいのかわかりませんでした。しかし、笑顔と思いやりの心で接すると短い言葉を発してくれたり、笑って意思表示してくれました。相手を思いやる気持ちがあれば心は通じ合えると、分かりました。利用者さんとの距離が縮まると、「加藤さん」と気軽に声をかけてくれる様になり、とても嬉しくなりました。また職員の方は、利用者さんと同じ目線に立ち、失敗には目を向けず、一人一人の個性を引き出し、その個性を伸ばす関わり方をしていました。

そして、私がすごいなと感じた事は、利用者さんが地域の

掃除や草むしりを嫌な顔一つせず、毎日当たり前の様にやっている事でした。

日常の作業でも一つ何銭という賃金で仕事をしています。しかし利用者さんは、お金を貰う喜びよりも、仕事の達成感や成しとげた事を喜びにしているように見えました。世の中には障害のある方を偏見の目で見ますが、私は社会に役立とうと頑張っている利用者さんの事を、もっとたくさんの人に理解して欲しいと思いました。

何事にも一生懸命で、真剣に取り組む、素直で綺麗な心は、私達が日頃忘れがちな大切な事を思い出させてくれます。私は初め、お手伝いをしているつもりでしたが実は私が利用者さんから、大切な事を学んでいたのです。

ボランティアとは、する側とされる側で、立場の違いがある様に見えますが、互いに学び合い、助け助けられたりして喜びを共感できる同じ立場である事を、忘れてはいけなないと思いました。

私は将来、このボランティア活動で学んだ事を活かしながら、園芸療法士になりたいと思っています。なぜ園芸療法士かというと、私は小学校一年生の時に学校に行けなくなった経験があります。人の心は目には見えませんが泣く事も、傷つく事もあると思います。私の父は、学校に行けなくなった私に「一步一步でいいんだよ」と大きな心でいつも見守ってくれ、母は学校に戻れる様に全力でサポートしてくれました。そんな両親は、幾度となく私を自然の中に連れ出してくれました。

新緑の中、初めての山登り、頂上に着いた時の達成感や目

の前を鷹が飛んでいく光景を今でも覚えています。野菜や果物の収穫をして泥だらけになったり、雪山で何時間も遊び続け、私は自然が大好きになりました。花や緑、草木には人の心を和ませ、安らぎや活力、生気を与える力を持っていると思います。私は自然の中で心が癒され元気を取り戻す事が出来ました。

人は抱えきれない苦しみや、悲しみを、人には見せたがらないものですが、どこかで心を打ち明けられる人を求めていると思います。園芸がそのきっかけになる事もあるのです。園芸療法でストレスを軽減したり、生きる希望を取り戻す方もいます。私は園芸療法士になって、傷ついた子供や、障害のある方の力になっていきたいです。

今の私は、草花や植物の専門的な事が何も分かりませんが、農産高校での三年間、知識と技術を身につけて、もっと園芸の事が分かる様になりたいです。

そしていつか、ボランティア活動で訪れた知的障害者施設で、園芸療法士として、利用者さんと会えるのを楽しみにして頑張っていきたいと思っています。



農業を学んで思うこと

東京都立農産高等学校 三年

千野 田雅美

私は現在、農産高校の農産科（定時制）三年に在籍している。実は、既に高校と大学を卒業している。一度高校を卒業していても、「科」の異なる高校であれば再入学ができるという制度があり、それを利用して今ここにいるのだ。

かつて私は普通科の進学校に通っていた。大学受験のために一生懸命勉強していた。高校生活は楽しかったし、先生方の工夫で印象深い授業も多々あった。それにもかかわらず勉強は苦しかった。なぜならば勉強に目的が見出せなかったから。当時は全くその理由が分からなかったが、今ならよく分かる。

東京生まれの両親のもと私もまた東京で生まれ育った。田舎を持たない私は夏休みに帰省する友達をいつも羨ましく思ったものだ。全く農業に縁のない私が農業に興味をもったきっかけは大学時代である。クラブで知り合った農学部の人々に案内してもらった畑には、真剣に四角いスイカ作りに取り組んでいる学生がいた。ナスはどこまで大きくなるかという実験をしている学生もいた。友人は蚕の顔で固体を識別できそうで一匹ごとに名前を付けていた。「なんだかよくわからないけど面白い」というのがそのときの素直な感想であ

る。その自由な発想が私にはとても新鮮だった。そして何かとっても大切なことだと直感した。工学部に在籍していた私はケミカルエンジニアを目指していたが、何かを生み出すことは「合成」が主な方法だと信じていたので「育てる」という手段がとても大切に思えたのかもしれない。それ以来、農業への興味と言おうか、憧れと言おうか、そのようなものが胸のずっと奥の方でくすぶり続けることになった。だから娘が農産高校へ進学したいと言ったとき、私は諸手をあげて賛成した。そして娘の卒業と入れ替わりに私は入学した。胸の奥深くにしまっていた小さな火が燃え上がった瞬間だった。授業がつまらない訳がない。数十年來の思いが詰まっているのだから、先生の一言一言がすべて私の養分になる。

それにしても残念に思うのは「なぜもっと人生の早い時期に農業に出会えなかったのか」ということだ。思い返せば小学生のとき、朝顔観察や学校の狭い小さな水田で田植えをしたことが農業との出会いだったと思う。しかし小学校低学年の私には農業に結びつく体験ではなかった。もう少し大きくなった頃、そう中学生あたりで出会っていたら、私の人生は全然変わっていたかもしれない。

ところで、娘をもつ母として常日頃から「教育とは教え育てると書くけど、何を教えて育てればいいのだろう」と考えていた。教育の中には知育、徳育、体育があり、それぞれ肉体、知恵、心の発育を促す。おそらく私もそういう中で育ってきたのだろう。一流会社と世間で言われる大企業に就職し、海外も含めて多くの友人に恵まれ、音楽や絵画など趣味をたしなむ教養も身に付けた。私の半生は教育の賜物である。感

謝している。しかし何かが欠けている。心のどこかでいつも何かを探している自分に気がついていった。「子供を自立させることが親の責任」という目標に異論はない。でも自立させるだけでいいのだろうか。一人前の社会生活を送れるだけでいいのだろうか。やはり、そこに足りないものを感じていた。

その答えは農業を学ぶなにあった。気が付けばそれは当り前のことだった。「命」への尊敬と畏怖の念である。しかし、農業を学ぶまではそれを実感させてくれる授業は他になかった。「欠けていたものはこれだったんだ」と足りなさを感じてモヤモヤしていた心の霧がすっと消えていった。もちろん頭では理解していたが、農業を学ぶ前は実感したことなどなかったことさえ気が付かなかった。農作業で出会う多くの生き物たち。ごめんね、人間が勝手に害虫などと呼んで、君たちだって生きること懸命なんだよね。共存できる知恵はないかしら。そして、今までは食べものとしてしか興味のなかった野菜たちが自分の主張を言い始める。それは素晴らしいものだった。他人に全く迷惑をかけない生き方。だって自分のエネルギーは自分で作れるのだから、何かを得ようと他者を傷つける必要がないのだ。こういうことを農業の授業を通して知った。

農作業は体力をつける。共同作業は社会性を養う。農業の守備範囲はきわめて広い。生物学は無論のこと化学や食物・栄養学、はては経済学にまで及ぶ。それらの知恵を知る。美しい里山の風や匂いも含めた環境は心を豊かにする情操教育そのものである。教育が目的とするすべてを農業は持っている。命を慈しむ農業を学ぶ学校に学級崩壊など考えられない

だろう。

農業を学び、農業を知り、新たな夢が私の中に生まれた。それは『農業を義務教育にとりいれる』ことである。残念だが既存の教科に命を実感させられた経験は一度もなかった。もし多感な若い時に農業を知れば、きっと未来は良い方向へ進むと思う。さらに付け加えるならば、地球規模の異常気象が進むなか、一人一人が農業の技術と知識を得ることができれば、人類の生存はより確率が増すだろう。さらには、都会育ちの青少年が農業を目指し、若い労働力が少ない現状の農業を救う一助になるかもしれない。そのような夢を私はこれからも見続けるだろう。

高等学校の部 佳作

将来の夢

愛国高等学校 三年

田 邊 好

私の夢は看護師になることだ。

「私の夢は看護師になることです。」

私はこの言葉を小学校三年生の時から言っていた。私は愛国学園に中学生の時から通っている。中学校から通った理由はただ一つ、高校に衛生看護科があるからだ。そして高校三

年生になった今、私は衛生看護科に通い、病院へ実習に行っている。

私が看護師を目指した理由は、母が影響している。私の母は今、看護師として働いている。私が小学校へ入学したのと同時に、母も看護の専門学校へ入学した。二年間、ほぼ毎日、夜中まで一人で勉強していた姿が私の記憶の中にはっきりと残っている。家の家事と勉強を両立できる母に私は憧れを抱いた。優しくて親友のような母を私は今も尊敬している。そんな母が看護師になったことで、単純かもしれないが、私の夢は看護師になることになった。

私は普段から「周りの人を笑顔にできる人になりたい」と思っている。人を笑顔にする、というのは、その笑顔にした人のサポートをすることだと私は思う。看護師も同じだと思う。医者をサポートをし、患者様を笑顔にするからだ。

小学校三年生の時の私は、単に看護師になりたい、周りの人を笑顔にできる人になりたい、という漠然とした目標だけで、どの科で働きたいというような具体的な目標まで見えていなかった。その漠然とした目標は実習へ行くまで漠然としたままで、実習前はそのままでは駄目なのではないかと思っていた。しかし実習へ行き、働きたいと思う科が見つかった。ここに書くのは恥ずかしいから書かないが、実習へ行き、更に看護師になりたいという思いが強くなった。

まだ実習中だが、実習中、一生忘れることのできないことがあった。私の受け持たせていただいた患者様が私の行った援助に対して「ありがとう。」と涙を流しながらおっしゃってくださったことがあった。普段、何気なく言っている「あ

りがとう」の五文字がこんなにも偉大なものなのか、と実感することができた。このことを書きながら、今も思い出して涙を流してしまいそうなくらい、印象的な出来事だった。私が行った援助に対して、こんなにも喜んでくださる方がいるのだ、と気付かされ、どの科で働きたいかという目標を見つける前の漠然とした目標に一步步、本当に少しずつではあるが、近付けているのではないか、と思った。

そして私にはもう一つの夢が出来た。それは衛生看護科に入ってから抱き始めた夢だ。その夢は、学校の先生になること。教科はもちろん、看護。私はとても尊敬し、憧れている先生がいる。私は愛国学園に中学生の時から通っていると書いたが、実は中学生の時はその先生の存在をあまり知らなかった。というのは、授業をもっともらったことがなかったからだ。高校に上がってはじめてその先生の授業を受けた。はじめての感覚だったと思う。その先生の担当教科は私の苦手な教科なのだが、その教科の授業を受けてはじめて「わかりやすい！」と思ったのだ。きっとその先生は、自分がわかっていくからという気持ちではなく、どう伝えたら皆が理解出来るのか、と自分のことだけではない先生なのだと思う。元々、先生になりたいという夢を抱いたことはなかったが、その先生を見て、私も先生になりたいと思った。私自身、中学生の時と高校生になっての勉強が大分変わり、専門教科が多くなり、勉強につまづいてしまった。病院で働き、実践を積んだあと、私の後輩となる、たくさんの看護師を夢見る人達に、先生と同じ教壇で、看護を教えたいと思っている。

この作文を書いている今、まだ夏休み真っ只中だ。愛国学

園の衛生看護科では高校三年間で准看護師を取ったあと、二年間で正看護師が取れる専攻科というものがある。中学校から愛国学園にいる私にとって、そのまま専攻科へ進むことが友人とも離れず、楽しく過ごすことが出来ると思う。だが、先生になりたい、という夢を抱きはじめてから、看護の大学へ行こうと決めた。もう一度、基礎からやり直し、もっと知識を取り入れたいと思ったからだ。この夏休みが終わったら、また実習がはじまる。そして九月中に大学の受験もある。だが自分の決めた道を絶対に諦めず、叶えたいと思う。



高等学校の部 作文朗読中の会場風景

鉄道実習を通じて学んだこと

岩倉高等学校 三年

菅 野 敦 也

私は現在、「鉄道の学校」といわれる岩倉高等学校に在学しています。ここでは、鉄道の専門知識を学ぶことができます。ほか、校内での運転実習や鉄道会社での駅務実習を体験することが出来ます。そこで今回、鉄道実習を通じて学んだことをお話ししたいと思います。

私は高校二年生の夏に鉄道実習に参加しました。実習内容は会社によって様々ですが、実際に改札に立ち、お客様の案内などの業務を体験します。社会人として働くための実務を体験できる貴重な機会です。

実習を希望した生徒は先生方による事前指導を受け、頭髪や服装などといった身だしなみを厳しくチェックされます。会社の一員として実際に働くので、実習駅の周辺の地理なども各自が把握しておく必要があります。

私が配属されたのは、JR東海の新横浜駅でした。実習期間は三日間で、私を含め十名ほどの実習生が参加しました。

実習一日目の朝、集合場所で待機をしていると、JR東海の社員の方が改札でお客様をご案内している姿を目にしました。私は改めて、「今回の実習は悔いのないように頑張ろう」と強く思いました。そして集合時間になり、社員の方が迎え

に来てくださいました。全員で挨拶をしたあと、社内に案内され、身だしなみを整え朝礼に参加させていただきました。

そこで私は、朝礼が始まる前の社員の方たちの様子に驚きました。みなさん仲良くお喋りをしていて、外では見ることの出来ない穏やかでアットホームな雰囲気だったからです。しかし、朝礼が始まる一分前には、真剣に仕事に取り組む厳しい表情に一変していました。そのとき私は自分もこの三日間、実習生として仕事をするのだということを改めて実感しました。

そしていよいよ実習開始です。私たちはまず駅構内を見学し、午後からは実際に改札に立ちました。改札に立って一分もしない内に、お客様から声をかけられました。高齢者の方で、「トイレはどこにありますか。」という内容でした。トイレの場所は事前に把握していたので、しっかりお客様をご案内することが出来ました。そしてお客様から「どうもありがとうございました。」と感謝のお言葉をいただきました。

私はその瞬間とても嬉しくて、それからは適度な緊張感で実習に参加することができました。初日は特に難しい質問もされず、社員の方たちの温かいサポートもあり、無事に一日目の実習を終えることができました。

実習二日目は改札実習のほかに、マルスという切符を発券するための機械の操作を体験しました。私は鉄道に関する知識は周りの同級生より乏しく、聞いたことのない寝台列車や特別な座席もありました。鉄道員になるためにはこのような列車の知識も必要なのだと感じました。そして、実際に窓口でマルスを使って切符を発券している作業を見学しました。

お客様の待ち時間を最小限にとどめるため、社員の方はとても素早くマルスの機械を操作していました。

私はその様子を見て、「かっこいいな。私もあの社員の方のように仕事のプロになりたい」という思いで見学していました。このような接客サービスを社員全員が行うことによって、お客様の中に会社への信頼が生まれているのだと感じました。

実習を行った中で失敗もありました。それは実習三日目のことでした。

改札でお客様から「静岡に早く着く新幹線はどれですか」という質問をされました。私は時刻表を指差し、「この新幹線が一番早く静岡に到着します」と答えました。そのあと社員の方にその答えが正しかったか確認しました。すると、私が案内した新幹線よりも早く静岡に着く新幹線がありました。私は「しまった」と思い、社員の方と一緒にお客様の所まで行き、お詫びと正しい説明をしました。するとお客様も、一番早く静岡に着く新幹線が他にあることに気付いていました。特にお叱りのお言葉はありませんでしたが、お客様に迷惑をかけてしまうところでした。お客様にとっては実習生だからという言い訳は通用しません。自分の言動の責任の重さを感じた瞬間でした。

私がこの鉄道実習を通じて



学んだことは、社員一人のミスで会社全体のイメージが悪くなってしまふ恐れがあることです。お客様と接する機会が一番多い駅員業務は、信頼を得るための重要な仕事です。私はこの実習を通して鉄道会社の社員の方たちは、一人ひとりがサービス、そして安全を意識して仕事をしているということです。そして常に向上心をもって働いていることも学び、今回の鉄道実習は私にとって、とても貴重な経験となりました。私はこの経験を今後の仕事につなげていきたいと思っています。そして、お客様から信頼され、仲間からも信頼されるプロの鉄道員を目指したいと強く思いました。

子供の健康を守りたい

蒲田女子高等学校 三年

細井千春

私は将来、保育園の栄養士になりたいと思っています。初めは、「食物関係の仕事が出来たらいいな。」と曖昧な考えでいました。そんな時、上級学校の体験学習で栄養について学びました。

栄養士は、一人一人の栄養管理をするのが主な仕事です。一人一人の身体状況や目的に合わせた献立作成から栄養計算、調理までの一連の流れの全てを行いと大変な仕事です。

しかし、そんな大変な仕事だからこそ、やりがいがあると思えました。

私は保育園の栄養士になったら、是非やりたいことがあります。一つは、野菜などを園児と一緒に育てることです。もう一つは、幼い頃より食の大切さについて知ってもらうことです。

今の子供は好き嫌が多いです。その中でも野菜嫌が多いです。私も嫌いなものがいくつかありました。しかし最近、克服出来たものもあります。それは、トマトです。どうしてもすっぱいところや、種のところのゼリーのようなところが苦手でした。それでも克服できたのは、自ら、実際にトマトを育てるという経験をしたからです。

私は園芸部に所属しています。毎年、夏にはナスやピーマンを育てています。今年は、ミニトマトを育てることになりました。初めは「食べられないのにトマトを育てるなんていやだな。」と思っていました。しかし、植物だって生き物です。しっかり水をあげて、手入れをしなければ枯れて死んでしまいます。日が続つにつれて緑色の実ができ、やがてきれいな赤色のミニトマトに育ちました。育ったものを部員たちで食べる時、私は「どうせ、すっぱくておいしくないトマトだろう。」と思い、嫌々ながら食べました。しかし次の瞬間、私は今トマトを食べたのか、そう思いました。今まで食べたトマトとは、全く違うものでした。味は確かにトマトなのに、嫌みのないとてもおいしいものでした。形はどこでも売っているものなのになぜ味がこんなに違うのだろうか。皮は固いし、種のまわりのゼリーもあるのになぜ今までのよう

に気にならないのか。私の頭の中は疑問でいっぱいでした。それを顧問の先生にも聞いてみました。答えは、無農薬で育てているところ、そして自分で育てたというところだと、教わりました。無農薬で作るとこんなにもおいしく出来ることを知りました。私はトマトを育てるとき、初めは嫌だと思っていました。そのマイナスの気持ちは次第に「他の部員が食べるから。」「手抜きで育てたくない。」「おいしく作りたい。」というプラスの気持ちに変わり、トマトを育てていくことが出来ました。気持ちだけで味が変わるとはもちろん証明することはできませんが、私は実際に気持ちを込めて作ったトマトをおいしいと感じました。

また、食の大切さを知ってもらうということについて、私は授業などで、栄養を考えた食事をする、体調はもちろん、勉強面では頭が働き、向上するということを知りました。実際に自分でも実践してみても食事を変えるだけで、こんなにも自身にプラスになることに驚きました。

人の一生の中でも著しく成長していく園児の栄養管理というのは大変重要なことです。私は、ただ食べるように言うだけでなく、園児と野菜を育てたり、触れたり、そして、それぞれの食べ物がどういう役割を果たしているかを話したりして、好き嫌いも無くせるようにしていきたいです。そのためには、私自身が勉強して、いろいろ工夫できる人になりたいと思っています。

私は今、栄養士になるために、学校での勉強をまず頑張っています。栄養士の勉強は、そう簡単ではありません。しかし、それを乗り越えて、「おいしい。」の言葉を聞けたな

ら嬉しいです。そのために、私は様々なことを学んでいきたいです。

私が学んだこと

国際理容美容専門学校 二年

高 橋 真 理

私は現在、美容師を目指して美容専門学校に通っています。私がなぜ美容師を目指したのか、それは、幼い頃に友人と髪の毛を結ったりして、オシャレに興味を持ち始めたことがきっかけです。私が友人の髪を結ったり、メイクをほどこすなどしていると友人が「真理、ヘアメイクとか将来なれば？」と言われヘアメイクという職業にもものすごく興味を持ちました。そこで、ヘアメイクアップアーティストになるべく、今、美容師の資格を取る為に美容専門学校に通っています。

私の通う専門学校では、美容師として必要な技術だけでなく美容師以前に人として必要な人間性をも学ぶことが出来ます。私はこの学校で様々なことを学びました。私が今までで学んだことは、主に三つあります。一つは仲間、チームワークの大切さです。美容師は個人でなくチームで行う仕事です。どんなに一人のスタッフが頑張っても周りのスタッ

フと協力してやらなければ仕事はうまくいきません。今、私たちのクラスをチームとしたら、チームワークは全く良い状態とはいえません。学校に入学したばかりの頃は、まだそこまで親しくないので多少の気遣いはできていました。ですが最近はとても親しい仲間になり、友人だから大丈夫と甘えるようになってしまいました。本来なら、親しき仲にも礼儀あり、ということわざがあるように、礼儀を気にする必要があります、気を遣う必要がないと思うほど親しい関係であるからこそ良い関係を保つために礼儀を守るべきなのだと私は思います。ほんの少しの気遣いで良いと思うのです。例えば授業中、みんなが先生の話をしっかり受けられるように周りは静かにするとか、ミーティングをする際、必要のないイスなどを一緒に片付けるなどです。このような小さな気遣いが一人一人できるようになればムダな時間を掛けることなく授業、サロンの例えるなら仕事ができるのではないのかと思います。私たちは全員そろって国家試験に合格したいと思っています。その為に今クラスが一丸となって授業に取り組んでいこうと思っています。

二つめは努力すること、がまんすることを学びました。美容師は少し何か技術を教わったからといって、すぐに出来るようになるものではありません。学校ではやり方を教えてくれるだけであって、出来るようになるのかは本人の努力次第です。少し教わって出来ないと思うにあきらめてしまうのは本人に出来るようになりたいという意志がないからだと思います。世の中には、少し教わっただけですぐに出来てしまう器用な人もいれば、なかなかコツがつかめず苦戦してしまう

不器用な人もいます。ですが、それはスタート地点が違うだけであって、最終的にたどり着くのはみな同じです。要は、その人自身が努力するのかしないのかです。私のクラスでも出来る人、出来ない人がはっきり分か



れています。それはやはり、努力の差です。私が見ている中で、出来ている人はそれなりに努力しています。出来ていない人は出来ない自分に甘えて努力をしようとしていません。私は努力もしていないのに泣き事を言う人がすごく嫌です。ですから、ちゃんと努力して、確実に成長しているクラスメイトを見ていると、私も頑張ろうと素直に思います。また、努力をするということは友人と遊びたくても少しがまんしなければならぬことも出てきます。でもそのがまんがあるからそれ以上の喜びがあるのだと思いました。

三つめは美容師のすばらしさです。美容師を客観的に見ると、私もそうであったようにとても華やかな職業に見えます。ですがその華やかに見えている裏にはたくさん苦難があるのです。例えば、ミスをしてしまったとき、お客様には分からない所でものすごくしかられます。それで泣きたくなっても決して笑顔を絶やしません。それから、美容師にはほとんど休みがありません。お昼と夕飯が一緒になることなどは稀ではありません。常にお客様第一に考えて仕事をしているのでしかたのないことかもしれませんが、体力の必要な美容師にとってはとても大変なことだと思いました。そして、なに

よりつらいのが、お客様に直接技術に関して言われることだと思っています。例えば、「あなたのシャンプー気持ち良くない。」ということと言われたときです。おそらく私は泣いてしまうのではないかと思います。先輩に言われるより、ずっとずっと辛いと思います。ですが、そんなことを言われたからといってその場で泣くこともできず、ただただそのお客様の話を聞いていなければならぬので、それにたえられる美容師ってすごいなと思いました。私の知人で美容師をしている人に聞くと、なぜそんなつらいことにたえていられるのか、それは、その後、同じ人にしばらくして、「シャンプー上手くなったわね。」と言われたからだそうです。その時はつらくとも努力をすることで新たに喜びを得ることができんだよ、とそう言っていました。私はこのような経験から、改めて美容師という職業を選んだことを誇りに思います。今後、この美容師への道を歩んでいきたいと思っています。

成長

東京都立農芸高等学校 三年

若松 なつき

私は幼い頃から植物の栽培に興味があり、農芸高校の園芸科学科に入学した。専科の授業では、野菜・草花・果樹の分

野ごとに植物の管理・栽培方法などを学んできた。入学してから二年と半年が経ち、植物についての知識は随分身に付いたと実感している。ところが私は、それ以上に大切なものを得たのである。

私は馴れない人と話すのが苦手だ。小学校・中学校では、この性格のせいで幾度も憤りを覚えた。例えば、席替えで席が隣になった子に自分から話し掛けられなかったり、調理実習などで話す機会があっても緊張のあまり口が利けなくなってしまうたり、などである。これではいつまで経っても仲良くなれるはずがないと思っただけにいたもの、なかなか一歩を踏み出すことができずにいた。そんな私の背中を押してくれたのが、農芸高校の現場実習である。園芸科学科では、基本的に一班六人、一クラスが六班になるように実習班が決められている。専科の授業は現場実習がほとんどで、実習班ごとに作業することも多い。

入学当時、まだ友達もいなかった私は、現場実習がとても不安だった。しかし、今までの自分を改めようと意気込んでいたので、班員と話す良い機会だと捉えることにした。現場実習中に分からないところを聞いてみたり、土の入った重たい袋を運ぼうとしていたら反対側を持ってあげたりしてみた。すると、驚くほど自然に会話することができたのだ。私はそういう時いつも、行動を起こした勇氣より、自ら話し掛けられた喜びの方が勝っていた。だからこそ続けていこうと思えたのだ。翌年、実習班が新しくなった時のことである。私の班は、お互いに普段はあまり話さない人どうしが集まった班だった。しばらくは実習班で作業する時、皆で仲良しが

いないと不満を言い合った記憶がある。ところが一緒に作業をしていくうちに、気が付けば班のメンバー全員で一つの話題を共有し、笑顔の絶えない楽しい雰囲気できていたのだ。以前の私は大人数と聞いただけで口が重くなり、全く会話を楽しめずにいた。班員はそんな私に話を振ってくれたりして、温かく班の輪に引き入れてくれたのである。これが良いトレーニングになったのか、いつの間にか大人数での会話に参加できるようになっていた。

希望者を募り行われたインターンシップでは、五日連続で大型園芸店で働いた。体験させて頂いた仕事は、花殻摘み・水やり・鉢替えなどの植物の管理、ラベル貼り・品出し・レジでの袋詰めなどだ。仕事中は必ず従業員の方が一緒だったため、多くの人と話す機会があった。人によって内容が様々で、聞いている時間の方が長かったが全く飽きることはなかった。そのうち、お客様への対応の仕方や植物について、自分から従業員の方に聞けるようになった。初めは緊張してガチガチだったが、馴れてくると会話を楽しめるようになっていた。私はこの五日間で、人と接することの楽しさと自分の世界が広がるワクワクさを実感したのである。

このように私は農芸高校で、一人の人間として大きく成長することができた。まず、農芸生は各々が素敵な個性を持っている。現場実習を通してそれらに触れるなかで、私自身の個性も引き出され磨かれたように思う。小学校・中学校では、親しい友達からも静か・大人しい子と言われることが多かった。しかし最近では、私の言動に対して笑ってくれる人が増え、面白いという声を耳にする回数も増えてきた。それ

がとても新鮮で楽しい私は、あまり話したことの無い人にも積極的に声を掛け、自分をアピールできる場を広げたいと思うようになったのである。インターンシップでは大型園芸店の仕事を体験し、農芸高校では扱わない植物の管理をすることができた。また、社会人の中に一人で混ざって作業をしながら人生経験や物事の考え方などを聞いたことは、私にとって大きな刺激となり勉強にもなった。全く知らない人に囲まれて会話をするなど以前では考えられなかったが、無事に乗り越えることができたので、今では強い自信となっている。インターンシップに参加して、より植物を知り自分を豊かにすることができたのである。

そして私が農芸生になり身をもって知ったのが、同じ目的を持って作業をする人と自然と会話は生まれてくるということだ。鉢上げや除草・天地返しなど、限られた時間の中で一つの目標に向かって作業をする。疑問に思ったり瞬間的に感じたことをふと口にした時、ほとんどの場合で返事をもらった。それは共感だったり笑いだったり、時には馬鹿にされたりもした。相手の反応は様々だが、私は特に何を考える訳でもなく馴れない人と会話をすることができていたのである。今の私がいるのは農芸高校に入学したおかげだと思う。なぜなら個性豊かな人々との交流の機会を沢山与えてくれたからだ。もし私が普通科に通っていたら座学が多いため、一步を踏み出せず真の自分を知らぬまま大人になっていただろう。私は農芸高校を選んで本当に良かったと思っている。卒業まで半年を切ってしまったが、残りの時間を悔いなく楽しく自分らしく過ごしていきたい。

努力する事の重要性について

東京都立赤羽商業高等学校 二年

清水紗弥加

私は、商業高校がどのような事をする所なのか、全くと言っていいほど分からないまま入学しました。なぜなら、元々考えていた進路先は商業科の高校ではなく普通科の高校だったからです。普通科の高校ではなく商業科の高校に進路変更した理由は、母の言葉でした。「今の時代、就職先を考える上では、普通科の高校よりも商業高校に行って、商業の事を学んだり、資格をたくさん取得した方が良いんじゃない？」この言葉に、「言われてみればそうかも知れない」と、考え直したのが二月でした。そのため高校見学にも行けず、パソコンや学校紹介の本などで調べただけの浅い知識のまま入学しました。

高校に入学し、人生で初めて商業科目を履修しました。一年生の最初の頃の学習内容は簡単だったため、すぐに理解することができ、楽しく学ぶことが出来ました。

しかし、授業が進むにつれ、徐々に内容が複雑で難しくなっていく、だんだん授業についていけなくなり、成績が下がってしまいました。その時ふと思ったことは、学校ではミスをしても分からなくても自分の成績が下がるだけで許されても、会社では小さなミス一つ許されないし、分からないな

んで以ての外。学校の内容すらも理解出来ないのならば、就職した時に使い者にならないということです。このままの状態では絶対に良くないと思い、その後、必死に勉強した結果、全商簿記検定の三級を取得する事ができ、一年間頑張ってきた良かったなと、やりがいと喜びを感じました。

二年生での商業科目は選択制だったため、何を選ぶか迷いましたが、電卓の授業を中心に選ぶことにしました。電卓を選択した理由は、電卓で数字を打つのが楽しかったのと、打っている時の音が好きだったからです。電卓の授業では、商業計算と普通計算の二種類を主に学んでいきます。

商業計算とは、電卓を使い、外国貨幣などの計算問題を解くというものです。難しい所は、似た形の公式がたくさんあり、それを全て覚えなければいけない所です。

普通計算は、計算問題をいかに早く解けるかというものです。難しい所は、正確に数字を打っていくだけでなく、「電卓を打つ速さ」も問題になってくる所です。しかも、利き手ではない方の手で電卓を打つというのがルールです。その理由は、数字を書くのと電卓を打つのを平行して行わなければならないため、利き手のままだと電卓を打っては答えを書くという動作をしている時間がむだになるので、その動作をしているよりも、利き手ではない方の手で、数字を打ちながら、利き手で答えを書いている方が、効率が良いと先生に教わりました。確かにそうかも知れないと思い、先生が教えてくださる通りに、打ちました。しかし、普段右手でしか字を書いたり動かしたりしていないため、自分が思うように手が動かず、ミスの連続。右手で打っていた時よりもすぐ遅くなり

ました。間違いだらけだし、打つスピードも遅くなるし右手に戻して打った方が簡単に打てると思いました。それでも先生は、「最初のうちは、なれないし遅いかも知れないけれど、きちんと練習してやっていけば絶対出来る。だから今は我慢。」とおっしゃっていたので、出来なくても遅くても左手で頑張って打ちました。その時に諦めなかったおかげで、今では問題なく打てるようになりました。まだまだ遅いけれど、諦めずに続けるということが重要だと実感しました。

中学生の時に、最後まで何かを必死になってやり遂げたり、失敗しても諦めずに続けたりという経験がなかったため、努力をし続けることがいかに大切か、赤羽商業高校に入学したことで理解することが出来ました。

これから先、今までに経験したことがないような困難なことがたくさんあるかも知れません。ですが、困難なことがあってもこの一年で学んだ「諦めずに努力する」ということを忘れずに色々なことに挑戦していきたいと思います。



デザインを伝えるということ

東京都立忍岡高等学校 三年

矢代 美菜萌

私は昔から物をつくることや絵を描くことが好きでした。中学時代は美術部に所属し、絵を描くテクニクを学びました。高校に入ってからのはものづくりを勉強したいと思い、服飾・デザイン系列の科目を学ぶ事ができる生活科学科のある忍岡高校に入学しました。

一年次「被服製作」という授業では基礎縫いから始め、ハーフパンツ・ワイシャツを二年次に上がるまでに作ることができるようになりました。初めて自分で着ることが出来る洋服を、自分でつくれる事に喜びを感じました。二年次の「被服製作」では甚平・浴衣といった和裁を勉強しました。和裁は洋裁と違い^く紵^くけなどの手縫いの作業も多く難しく感じました。また、洋服を作る時は型紙があるのに対し、浴衣のような和服には型紙がなく、しるしもチャコペンでなくへらで付けていくので、初めは慣れない作業に少し困惑しました。そして新たに「ファッションデザイン」という科目が増えました。自分でデザイン画を描いて製図をし、そこから展開をして型紙を作り、デザインに合った生地を選び一枚の服にしていきます。「被服製作」とは違い、服づくりの一連の動作を「ファッションデザイン」では学ぶ事ができ、服づ

くりのおもしろさをこの授業で初めて実感しました。また自分でデザインをして服として形にできる喜びも同時に知ることができました。服飾以外の授業では「カラーコーディネーター」という授業で、色彩について学びました。色を知るという事で、服飾系の授業でもデザインをする際、それまでは好きな色を当てはめていましたが、色合いや色の持つイメージ・印象を考えられるようになりました。三年次「ファッションデザイン」ではアパレルCADを使い、二分の一サイズのワンピースを作成しました。東レのパターンマジックを使いデザインしたワンピースの製図をし、主にアドビのイラストレーターで模様を作っていました。普段生地を選ぶ時は、自分のイメージに合ったものを選びますが、この課題では自分で生地をデザインすることができ、作品が完成した時は達成感が一段と大きかったです。そして三年間の集大成である「課題研究」で、私はコルセットについて調べ、コルセットを取り入れたドレスを作成しました。女性の体を美しく見せるということをコンセプトとし、コルセットを「デザインとして」ではなく、本来の目的である「体を引き締めるため」に使用し、飾り紐にジッパーではなく紐で締め上げる形にしました。一・二年次で学んできた服づくりの技術や知識をこのドレスで発揮することができ、入学時には考えられなかった程、自分自身でも成長することができたと感じました。

服飾やデザインについて学び、実際にデザインをして作品を作っていく中で、私はあることに気が付きました。作品には作った人の伝えたいこと・コンセプトが必ずあるという事

です。私は服づくりやデザインをする中で身をもって知ることができました。そして、それを発表する場が少ないのではないかと感じました。発表する場がないのは大変もったいない事であり、私は作品を通じてメッセージを伝えていきたいと思うようになりました。

高校三年間で私はデザインについて更に興味をもち、もっと多くの視点から学んでいきたいと思うようになりました。また、自分の作った作品やデザインに対して先生方から「人とは違った感性をもっている」と言われる事もあり、作品を見ただけで自分が作ったものだと思えてもらいう事も増えました。デザインの特徴が浸透している事に喜びを感じており、この先自分にしかできない事をしていきたいと思うようになりました。なので大学へ進学したら、デザインをするということや伝える為の表現テクニックを深く学んでいきたいと考えています。



将来の夢

東京都立農産高等学校 一年

雑賀優花

私の将来の夢は庭師になることです。そう思うようになったきっかけは名越久美子さんという一人の女性でした。

私の地元は公園がとても多い所で幼い頃から一日中友達と泥まみれになって遊んでいました。また、その公園というのも遊具が充実しているわけではなかったので、私達は木にのぼったり草や花、枝を採ってアーチや花かざりをつくったりと、とにかく緑とふれあっていて、幼い頃の私達の遊びに緑は必要不可欠な存在でした。そんなこともあり、私は幼い頃からものづくりや緑が好きで、将来もこれらに関わることをできる仕事に就きたいと思っていました。そんな時にインターネットで知ったのが名越久美子さんでした。彼女は庭師歴六年の一級造園技能士、現在26歳の女性です。主に樹木の剪定作業、作庭や石積み、石張りなどを行っています。そして彼女はこの仕事について、こう言っていました。「作業の現場が変われば、一つとして同じ仕事はありません。剪定するにしても木によって切り方が違い、石を据えるのにも、植栽するにも、人によっても構想が全然違うので同じものは絶対にできない。だから飽きなくて楽しいです。」私はこれを聞いて、この仕事は私にむいているのかもしれないと思います。

した。決して私があきっぱいわけではなく、私は一つの仕事に就いても多くのことを体験し、たくさんのことを学びたいと思っています。私は、この名越さんの記事をよんで、庭師の仕事に興味を持ち、なりたいたい!!思うようになりました。私には将来庭師になったらつくりたいと思っています庭があります。それは四季のある庭と、心がやすらぐ、リラックスできる庭です。

日本は四季のある国として有名です。大昔にうたわれた俳句などでも四季は大きく関わってきました。ある意味、四季は日本の文化といっても良いのかもしれません。私はその四季を大切にしたい庭をつくりたいと思っています。具体的には、春には満開の桜が咲きほこり、花壇にはカラフルなチューリップ、またスイートピーやカルミアが咲いていると良いなと思います。特に、スイートピーには門出、カルミアには大きな希望、大志を抱けという花言葉があり、新生活が始まる春にぴったりの花だと思っています。夏には様々な種類の草花を混ぜるのではなく、桜の散った後の青々しい緑の葉と、見ている人にまで元気をあたえてくれるような、大きなヒマワリ。また、大きな噴水を置いて、真夏の暑さを忘れてしまうようなすずやかな庭にしたいです。また、秋は紅葉のあたたかな色合いと、キンモクセイの香り。また、ベンチを増やして読書をしたりなど、ゆっくりとした一人の時間を味わえるような空間にしたいです。そして冬には、大きなクリスマスツリーがあって、老若男女みんなが楽しめるような、またその中にはウメの花のつぼみがふくらみ始めて春のおとずれを感じられるような場所にしたいです。これらのように

一年間のいつ来てもまた違った雰囲気を楽しむことのできる庭を造りたいと私は思っています。

また、緑には人の心を癒す力があると思います。実際、病院や老人ホームなどでも多くの緑が使われています。それに私も自分の部屋の学習机に観葉植物を置いているのですが、無かった時とくらべると、部屋自体も明るくなったように感じるし、勉強している時、集中力が長くもつようになりました。また、つかれたなーと思うことがあった時も、ただぼーっと部屋にある植物達をながめているだけで、つかれがかるくなったように思えたこともあります。私は、このように人の心を癒すことのできる力をもっている緑を使って、来た人がホッと息をつくことができる、何かつらいことがあったら、またここに来ようと思えるような、人々にやすらぎをあたえられる庭も造りたいと思っています。

しかし、今の私は庭師の仕事とはどういう事なのかくわしくは知らないし、また、草木に関する知識もまだまだ多くありません。だから私は、これからの学校生活、私生活などで学んでいくことを誰よりも多く吸収し、技術を身につけたいと思っています。

そして将来庭師になってからも、日々の生活から多くのことを学び、身につけ、庭づくりをとおして間接的にでも人に幸せをあたえられる仕事をしたと思っています。これが私の将来の夢です。

インターンシップによって 学び得たこと

東京都立第五商業高等学校 二年

中山 真穂

私は、高校卒業後の進路を就職と考えています。企業で仕事をさせていただく上で身に付けておきたい事や、具体的にどんな職業に就きたいかを学びたいと思い、今回インターンシップに参加しました。

私が職業体験に伺ったのは、高齢者の方の在宅サービスを行っている法人です。そこで、私は在宅サービスを行う上でとても大事な「丁寧の一つ一つ仕事をする大切さ」、「任せられた事をきちんとこなす重要さ」、「仕事をする楽しさ」、「感謝をされる嬉しさ」、この四つの「さ」を学ぶことができました。

一つめの「さ」は、丁寧に一つ一つ仕事をする大切さです。高齢者の方が相手という事もあり、普段全く気にしないようなことにも気を付けるようになることが、特に重要でした。お食事を運ぶ際にもしっかりと目を合わせて、一言声をおかけしたり、お茶をお配りする時には熱すぎないように温度に気を付けたりと「丁寧に」を具体的に学びました。他にも物をお渡しする、受け取るといった普段の生活で何気なく行う事も、あらためてこうしたら受け取っていただきやすい、

もらいやすいといった風に自分と考え、高齢者の方の立場に立って考えられるようになり、「丁寧に」てきぱき仕事をすることはとても大切なことでした。

二つめの「さ」は、任せられたことをきちんとこなす重要さです。職員の方をお願いされた仕事を行う事は当たり前だと思っていましたが一、一度にいくつかの仕事を教えていただくと、他の仕事がおろそかになってしまっている自分に気が付きました。そんな事では将来企業に入って仕事を任せていただけないと強く反省しました。だから、どんなに大変な仕事や細かい仕事でも責任感をしっかりと持って、任された仕事をきちんとこなす重要さを、改めて学ぶことが出来ました。

三つめの「さ」は、仕事をする楽しさです。お食事の配り方や朝の休憩時にお渡しするお茶の入れ方、他にもお迎えの仕方が分かったりと、どんどん自分のやるべきことが分かるようになり、仕事を楽しく感じるようになりました。また、今回は高齢者の方と一緒にレクリエーションやパズル、間違い探しなどをやらせていただきました。間違いを一緒に探したり、パズルと一緒に考えたりしながら、たくさんお話が出来てとても楽しい時間を過ごしました。また、私の方から「一緒にやっても良いですか？」と聞くのが最初はとても



緊張しましたが「やろう、やろう。」と言って下さって嬉しかったです。仕事を出来るようになることが楽しいと思えることにより、相手の方を思いやることができるんだと学びました。

四つめの「さ」は、感謝をしていただく嬉しさです。お願いされた仕事を終えると職員の方に「ありがとう。」と言っていただき、しっかりやり遂げた達成感とほんの少しの作業でも感謝をしていただいてすごく嬉しかったことを覚えています。また私が最も嬉しかったのは、やはり高齢者の方には「ありがとう。」と言っていたいただいた時でした。お茶をお渡しした時、お食事を配った時など本当に少しの事をやった時でも、笑顔で「ありがとう。」と言って下さり、「ありがとう。」という言葉が聞きたくて、より一層仕事をきちんと行いたいという気持ちになりました。「ありがとう。」と言っていたいただいたことに私も感謝したいです。「ありがとう。」の深い意味を学びました。

今回のインターンシップで仕事をするために大切にしたい事をしっかり学びました。仕事の「大切さ」「重要さ」「楽しさ」「嬉しさ」を特に大事にし、忘れないようにしていきたいと思えます。この学んだことを今だけでなく将来もしっかりと仕事につなげていき、自分がどんな職業に就きたいかという選択にも活かしていこうと思います。将来の仕事だけでなく、今の高校生活においても改めて大事なことに気が付くことが出来たので、仕事をする時だけではなく、普段の日常生活や学校生活でも、このことをいつも忘れないようにしていきたいと思えます。

伝統を受け継ぐ

東京都立農業高等学校 三年

深瀬彩加

みなさんは石の声を聞いたことがありますか。石の声なんて聞こえる訳が無いと思われる方々がほとんどでしょう。

私は都立農業高等学校の緑地計画科に在籍しています。二年次から専攻造園を学んでいます。なぜ造園を専攻したのかというと、先生に「造園をやってみないか」と誘われたからです。専攻造園は造園技能士という国家資格を取得することとを主とした専門科目です。二年次に三級を受検し、合格した場合は三年次に二級を受検します。三級が不合格だった場合はもう一度三級を受検します。三級の実技試験は簡単な四ツ目垣を作成し、縁石を二つと敷石を三つ据え、弧を描くように自然石を据え、低木と下草を植栽します。それから手ばうきなどで整地をし完成させます。二時間で作り終わらなければ減点されてしまい、二時間半までに終わらなければ打ち切りになるのです。

私は図面を写し、寸法を全て覚えめました。当初図面通りに庭を造ることは簡単だろうと思っていました。しかし、四ツ目垣の柱を一本建てるだけで三時間もかかってしまいました。最初は時間がかかるものだろうと考えて私は毎日練習をしました。試験が近づくと実際の試験と同様の練習がありま

した。その練習は四日間あります。初日は五時間かかりましたが、一日に一時間縮めることを目標に練習し、四日目にやっと二時間半を切ることができました。実技試験は庭園工事以外に要素試験があります。要素試験は樹木の枝や葉を見て、どの樹木か答えるものです。それに加えて学科試験もあり、三つの試験を合格できなければ検定に合格できません。要素試験はたくさん葉を覚えるのに苦労しました。図鑑や実際の樹木を見て少しずつ勉強していきました。学科試験は過去の問題を解いて勉強しました。要素試験と学科試験は日々の勉強のおかげで無事に終わりました。庭園工事も練習や先生の指導のおかげでなんとか二時間半で図面通り終わらせることが出来ました。そして三級は無事に合格することが出来ました。

三年生になり、私は二級を受検することになりました。三級に合格すると思っていなかったのですが、気が進みませんでした。が、せっかくなので頑張ってみようと思い、受検することになりました。二級は三級の図面を全体的にレベルアップさせたものを作ります。私は苦労しながらも二級を頑張って作りましたが、毎回石の据え方について合格点をもらえずにいました。その時に先生から「石の声を聞け」と言われました。私は何を言っているんだろう、と思いました。それからしばらくして先生の授業中に配られたプリントを見て気付きました。石と石の並び方や石と石の距離、石の据え方にはひとつひとつに意味があるのだということを知った私は二級の図面を思い浮かべました。飛石の並びや合端^{あいば}は人が歩きやすいように作られています。しかし私の作った庭は人のことなど考

えていませんでした。他にも、自然石の並べ方も、どの面を使うべきかを考えずにただ置いているだけでした。造園はただ図面通りに作るだけではないのです。ひとつひとつの意味や役割を知った上で考えて作らなくてはいけないのです。私は造園の奥深さに感動しました。造園は人と自然の関わりを表しているのです。

今、私は造園の試験が全て終わり、合否を待っています。造園の試験が終わったらもう造園には関わりたくないと二年生のころから思っていました。しかし、造園の伝統や細やかな気遣いに触れ、もっと造園に関わりたと思いました。これから造園の奥深さや伝統について考え、人々の暮らしに役立てられるようになりたいと考え、大学に進学して専門的に学ぼうと考えています。造園の長い歴史の中で培われてきた伝統を理解した上で、近代における新しい庭園の形を作りたいです。



専修学校の部 佳作

舞台設営の力

中央工学校 二年

廣 田 遥

私は今、舞台やコンサートの設営について学んでいる。そして、将来は「人を幸せにする」仕事をしたい。舞台設営には人を幸せにする力があると信じている。

私が、この舞台設営に興味を持ったのは、高校三年生の時に観に行ったコンサートがきっかけだ。公演の一ヶ月前に東日本大震災が発生したため、公演は不可能かと思われた。それでも、舞台美術や照明、音響を大幅に変更しつつ、いつもと変わらない素晴らしい公演だった。

そして公演の最後、出演者からの一言で私は舞台設営を学ぶ事を決意した。

「本当は公演はできないと思った。けれど、スタッフの皆がこのステージをたった一ヶ月で一から考え直してくれた。おかげで今回の公演ができた。ありがとう。僕は幸せです。」私は衝撃を受けた。今まで、裏方という存在はただセットを作っているだけだと思っていた。しかし、その裏方こそが公演を支え、観ている人だけではなく出演者までも幸せにする事ができることを知った。舞台設営を学び今度は私自身が誰かを幸せにしたいと思った。

専門学校では、様々な分野の設営を学ぶ。コンサート分野ではステージのデザインから図面の作成、機材の組み立てを経験する事もできた。大道具の分野でも、日本古来の尺貫法を覚えるところから始まり、大道具の作り方や仕込みを学ぶ。その他にも、照明や舞台機構など着実に知識と技術を身につけていく日々はとても充実している。

日々の学習の中で思い通りにいかない事や辛い事は当然ある。特に大道具を作る実習では現場さながらの緊張感があり、厳しい言葉も飛ぶ。講師の先生に怒られ落ち込んだり、逃げ出したい時もあった。イベントでの設営は朝早くから夜遅くまで作業が続き、裏方という業界の厳しさをひしひしと感じる。

それでも、その厳しさを乗り越えられるだけの喜びが舞台設営の仕事にはある。やはり「人を幸せにできる」からだ。

学校に入り、初めての大きなイベントは文化祭だった。二日間かけて、学生が料理を販売する中華街のセットを設営した。セットの中で生き生きと作業をする学生や訪れるお客さんが笑顔だったのを覚えている。自分たちの作ったセットが少しでもこの笑顔のきっかけになっていると思うととても嬉しかった。

その後も、クリスマスコンサートや卒業式、入学式など様々な場面での設営や仕込みを経験した。作業は常に大変だが、舞台に立ったりセットを使う人達が充実した表情をしている。この表情を見る事ができるのが舞台設営という仕事のやりがいであり、喜びだと思う。

舞台設営は裏方の仕事であり、表舞台に出ることは無い。

セット自体が観た人の記憶に残る事もあまりないだろう。しかし、舞台に関わった人、観に来た人達の「楽しい」「面白い」といった気持ちのきっかけづくりになっている事は確かだ。そして、この気持ちが「幸せ」に繋がっている。この繋がりを感じたとき、舞台設営という仕事のやりがいが生まれるのだ。

私は、これから就職し社会に出る。学校とは比べ物にならない程、大変な思いをする事も挫折をする事もあるだろう。けれど、経験を積み一人前の仕事ができるようになったとき、「幸せです。」と言ってももらえるような仕事を私はしたい。

専門学校に入って学んだこと

中央工学校 一年

若松 正太郎

中央工学校に入学し、専門学校の授業を受けて最初に感じたことは、勉強に対して受け身ではないかと思ったことでした。高校までの勉強は、どちらかというと受け身でした。例えば、一つの授業で習ったことをノートに取り、問題を数問こなして先生の指示に従っていけば良いというような勉強しかしていませんでした。しかし、専門学校での授業は、例えば製図やCADでは先生の指示通りにはやっていきます

が、部品の詳細な寸法等やCADの操作方法は、自分で資料を調べたり、クラスメートと協力したり、先生に質問をするなど考えぬいていかなければ授業についてはいけなかったと感じました。

製図、CADの授業においては、今までの意識を変

えなければならなかったと感じたことがもう二つあります。一つめは、図面を製図する時はその図面を見て、部品や製品を実際に作る人の側に立って分かりやすい図面を製図します。常に相手や周りを意識していかなければならないということです。二つめは、製図をする上で必要な製図のルールも、場合によっては一つに限定されない場合があるということです。これも、その時の状況や相手によって自分でより適切な判断をしていかなければならないということです。これらは、自分のために勉強してきた高校までの学習には無かったことだと思えます。

正直、私は専門学校の授業を言葉は悪いのですが「なめていた」部分がありました。学校なのだから高校の授業の進め方とさほど変わらないかと思っていました。しかしこの中央工学校に入って授業を受けてみて、仕事に直結したものであり、それはやはり厳しいものだと思えました。このことから専門学校の授業は社会の入口であり、ここできちんとやらなくては、社会でついていけないと思いました。



今まで「適当に授業を受けていればどうにかなるだろう」という甘い考えがあったのですが、気持ちを入れ替え、主体性をもってこれからの中央工学校での四年間を過ごしていきたいと思っています。

この学校に入ってまだ半年たらずですが、授業を受けていく中で私の職業観は変化し始めていると思います。前にも書きましたが、進路が決まるまでは職業に就くということは生活をするためにお金を稼ぐ手段と思っていました。しかし製図の授業から感じたように、相手の立場に立って考えたり、自分の仲間と協力したり、仕事に携わるすべての人々が一つの仕事に関わって作り上げるということがとても大切なことだと分かってきました。自分の仕事に対して責任をもち、愛情をもって成し遂げ、出来あがった製品に誇りをもてるようになるばいい仕事が出来るとは思いません。そして、自分の仕事がどのような形でも社会に役立ち貢献できれば、それは自分自身をも成長させ、目標にもなると思います。仕事をすることは社会と自分、様々な人々と自分を結ぶ、健全な社会生活を送るための、重要なものでもあると思います。

私の将来の夢は、自立した社会生活が出来る大人になることです。この夢を叶えるためには、大前提として仕事をしてお金を稼がなくてはなりません。私が選んだ中央工学校で技術を学び、技術者として仕事をすることを選びました。手職をつければその技術によって、多くの仕事が出来るとは思いません。これまでに授業を受けた中で、社会や人々に役立つ製品を生み出す技術者という仕事は、大変やりがいがあると思います。いろいろな動作をする機械は、自分

の周りにありとあらゆる物の中に存在し、現代社会においては欠かせない物です。それを作り出す仕事に関わりたと思いますし、もっと役立つ機械を作り出してみたいという夢もあります。

私はまだ機械技術者としての勉強を始めたばかりです。で、機械のこと、技術者としての知識はまだありません。しかし、これから様々な技術を学び、それを身に付けていきたいです。そして、自分の能力を生かして自分自身が成長できる、社会に貢献出来る様な仕事を選びたいと思います。



表彰式 賞状の授与

平成 25 年度 作文コンクール 応募校一覧（応募数・入選数）

東京都産業教育振興会

（中学校の部）

番号	区・市名	学校名	応募 人数	入選 者数
1	新宿区	牛込第二中学校	3	
2		牛込第三中学校	1	1
3		落合第二中学校	9	1
4	文京区	第六中学校	3	
5	墨田区	桜堤中学校	2	
6		立花中学校	1	
7	品川区	日野学園	10	
8		荏原第一中学校	1	
9	目黒区	第八中学校	10	
10	大田区	大森第一中学校	1	
11		大森第六中学校	1	
12	世田谷区	松沢中学校	10	1
13		喜多見中学校	4	2
14	中野区	中野中学校	2	1
15	豊島区	池袋中学校	9	
16	北区	浮間中学校	2	
17		王子桜中学校	2	1
18	荒川区	第七中学校	10	1
19		原中学校	2	
20	練馬区	中村中学校	8	1
21		開進第三中学校	1	1
22		開進第四中学校	2	
23	足立区	第六中学校	10	2
24		第七中学校	5	
25		第十二中学校	8	
26		洲江中学校	1	
27		千寿青葉中学校	3	
28	葛飾区	新宿中学校	2	
29		堀切中学校	10	1
30		常盤中学校	1	
31		一之台中学校	7	1
32		葛美中学校	3	
33	府中市	府中第九中学校	1	
34	調布市	第四中学校	10	1
35		第六中学校	1	
36	都立	白鷗高附属中学校	10	4
37		大泉高附属中学校	10	6
38	私立	愛国中学校	3	1
計			179	26

（高等学校・専修学校の部）

番号	学校名	応募 人数	入選 者数
1	都立中野工業高等学校	3	
2	都立農芸高等学校	1	1
3	都立赤羽商業高等学校	4	1
4	都立北豊島工業高等学校	1	
5	都立忍岡高等学校	10	1
6	都立墨田工業高等学校	1	
7	都立農産高等学校	10	3
8	都立橋高等学校	4	
9	都立野津田高等学校	1	
10	都立瑞穂農芸高等学校	10	1
11	都立第五商業高等学校	3	1
12	都立農業高等学校	10	1
13	愛国高等学校	10	2
14	岩倉高等学校	7	1
15	蒲田女子高等学校	8	1
16	国際理容美容専門学校	10	1
計		93	14

1	青山製図専門学校	5	
2	中央工学校	3	2
計		8	2

まとめ

校 数 （入選校数）	応募 者数	入選 者数
中 学 校 38 校 （16 校）	179	26
高 校 等 16 校 （11 校）	93	14
専修学校 2 校 （ 1 校）	8	2
総 計 56 校 （28 校）	280	42

平成二十五年 作文選考委員名簿 (順不同・敬称略)

東京都立農産高等学校長(高校・専修の部 委員長)	後藤 哲
東京都立府中工業高等学校長	瀧澤 勝
東京都立赤羽商業高等学校長	昼間 一雄
東京都立王子総合高等学校長	今澤 秀夫
東京都立広尾高等学校副校長	石坂 敦子
安部学院高等学校校長	安部 元彦
安田学園高等学校教頭	稲村 隆雄
国際理容美容専門学校教頭	佐谷 肇
足立区立第十二中学校長(中学校の部 委員長)	杉浦 伸一
東大和市立第二小学校長	井内 潔
港区立神応小学校長	高松 政則
小平市立小平第十五小学校長	熊井 久乃
青梅市立泉中学校長	高橋 章次
立川市立第四小学校長	大神田 佳明
新宿区立落合第二中学校副校長	深井 明美
新宿区立牛込第三中学校副校長	寺島 京子
荒川区立峡田小学校副校長	出井 玲子
立川市立立川第九中学校副校長	坂詰 悦子
東京都教育庁指導部高等学校教育指導課指導主事	鈴木 誠二
東京都教育庁指導部高等学校教育指導課課務担当係長	二宮 浩二
東京都教育庁指導部義務教育特別支援教育指導課指導主事	富永 大優
東京都教育庁指導部義務教育特別支援教育指導課指導主事	吉川 泰弘

あとがき

作品集「明日に生きる」第二十四号発行にあたり、応募くださった多くの皆さんの努力はもとより、それぞれの教育現場でご指導いただきました先生方、選考委員の諸先生方及び関係の皆様方のご協力、ご尽力に心より感謝申し上げます。

本年度の応募作品は、中学校の部一七九編、高等学校の部九三編、専修学校の部八編の、合計二八〇編の応募がありました。応募数全体では昨年度より六編の増加でした。

表彰式は、平成二十五年十二月二十日に都庁・都民ホールを会場として、本会役員及び選考委員の出席のもと、保護者の方々や引率の先生方の参加をいただき行いました。

作品集の作成において、編集では人権に配慮するとともに、事実誤認を除き「原文尊重」を基本といたしました。誤字や脱字についても、明らかなものについては直させて頂きましたがその他は原文通りです。

生徒や学生の皆さんが、日々の学習活動や体験の中から学び得たことや自己の在り方や将来の職業観につなげるものがたくさん寄せられました。これからより多くの皆さんの応募を期待しております。

また、この作品集が会員校はもとより、教育諸機関等において広く活用されることを願っております。

(長)

明日に生きる 第二十四号

— 作文コンクール入選作品集 —

平成二十六年三月一日 発行

発 行 東京都産業教育振興会

〒163-8801 東京都新宿区西新宿2-18-1
東京都教育庁都立学校教育部高等学校教育課内
電 話 〇三―五三二〇―六七二九
FAX 〇三―五三八八―一七二七

印 刷 株式会社小葉印刷所